

The background of the entire page is a close-up photograph of autumn foliage. It features a mix of green, yellow, and orange leaves, some of which are slightly blurred, creating a sense of depth. The lighting is warm, typical of late afternoon or early morning. The text is overlaid on this background.

創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

X／神と諸民族

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

— 1976年版 —

第2部 創造主の造られた世界

X 神と諸民族（創世記七～八章）

諸民族の系図

一〇章は歴史的に驚くほど正確な記録であることを、しばしば高等批評の人々でさえ認めます。他のどんな資料から得られる古代諸民族に関する記録も、これに比するものではありません。その古さと内容の豊かさは他に類を見ません。ウィリアム・F・オールブライト博士は、中近東の考古学に関する著名な世界的権威者として一般に認められています。彼は聖書の無謬性を信じていませんが、この諸民族の表に関して、次のように述べています。

「創世記一〇章の記録は古代文献中、類を見ないもので、家系図の形で人々の分布を最もそれらしい状態で残しているギリシア人の文献でさえ比較にならない。創世記の諸民族の一覧表は驚くほど正確な記録である。」（『バイブルランドにおける最近の発見 Recent Discoveries in Bible Lands』—ロバート・ヤングの「解説的

聖書用語」索引の付録文献 [New York: Fank and Wagnalls, 1936] 一二五頁)

古代の歴史上の諸民族と、有史前のノアの時代と洪水前の人々の唯一のつながりがここにあります。ノアの孫、曾孫の名が挙げられ、彼らの子孫が築き上げた町あるいは国を見極めることができます。考古学者たちが発見した他のどんな古代の文書も、その知的内容と正確さにおいて、これに比するものは全くありません。一種の家族の記録の形をとって、家族の中の尊敬されている族長が生きている間保持し、その子孫に受け継いだようです。

来るべきすえに関する神の約束に、最も関心のあったノアの息子の一人としてセムは、このような記録を保持していた人として最もふさわしい人だったはずで、一〇章一〇、一一節によると、セムは洪水後五百二年も生きたので、この諸民族の一覧表に含まれる全期間を生き抜いたこととなります。ハムとヤペテの息子たちは、洪水後わずか三代しか記されていないのに、セムの子孫は六代まで記されているのは注目すべきことです。おそらく、バベルの後の分散後、彼は他の家系の子孫と接触を持てなかったことを示しているのでしょう。バベルの出来事を書いた後、セムの署名が、一〇章一〇節に書かれています。

一〇章にある名前と、諸民族、特に考古学者によって明らかにされている古代の民族の名前とが多くの場合合同一であると判定できます。こういうわけで、この章は、記録された歴史と、聖書を除いては古代の伝説によってのみ受け継がれている有史前の時代との橋渡しを提供しています。

一〇章一節 ノアの子セム、ハム、ヤペテの系図は次のとおりである。洪水の後、彼らに子が生れた。（協会訳）

この節の最初の部分は、おそらく、六章九節で始まった前の部分の標題を書いたものです。「これはノアの息子たちの系図である。」おそらく、三人の息子たちは九章二〇節から二七節の精神的外傷となる事件の後、各々別の道をたどったことでしょう。そして、父ノアの葬儀をもに行なうため、再びいっしょに集まり、ノアの死の記録をもって彼らの世代を終わらせました。セムはおそらく、しばらくの間、その三家族の記録をとりつづけ、バベルで言語が乱されるまで管理しつづけたことでしょう。バベル以降、セムはハム族やヤペテ族と接触できなくなったと思われるます。

一〇章二〜四節 ヤペテの子孫はゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシエク、ティラス。ゴメルの子孫はアシュケナズ、リファテ、トガルマ。ヤワンの子孫はエリシャ、タルシシュ、キティム人、ドダニム人。

セムが諸民族のこの系図の初めの編集者であったと仮定すると、長子ヤペテの家族から始め、ついでハムの家族、そして、最後に自分の家族の順で書いたのは当然のことです。いろいろな家族には、息子たちと同様に娘たちもたくさんいたと思いますが、息子たちの名だけが挙げられているのは注目すべきです。ヤペテの七人の息子たちの名、ゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシエク、ティラスが挙げられています。これらの名に、時間の経過につれて常に見られる形態上の徐々に起こる変化を認め、さらに、聖書と世俗の歴史的記録や考古学上発掘された遺物の両方を適切に関連づけてみると、これらの名の多くを跡づけること

ができ、彼らをインド・ヨーロッパ語族の祖先と認めることができるのです。

たとえば、ヤペテという名自体、ギリシアの伝説上の父祖ヤペトスとして、また、インドではアーリアンの有名な祖先ヤペティとして文献に見いだされます。最初の息子ゴメルは、通常、ヘロドトス、プルターク、その他の古代著者が、黒海の北、シメリア地方の人々と同じと認め、これはクリミヤという地名で現在生きつづけています。最終的にゴメルの子孫の一つの流れは西方に移動し、おそらくその名が、ドイツとウエールズのカンブリアとともに残されていると思われます。

ゴメルの息子の三人は、アシュケナズ、リファテ、トガルマという名でした。ユダヤ人たちは、アシュケナズをドイツと同一と見ています。そして、今日に至るまで、ドイツ系ユダヤ人はアシュケナズと呼ばれています。ある人種学者は、アシュケナズという名前は、ドイツからデンマークとその北の島々、ヨーロッパ大陸の西岸に移り住んだものとして、スカンディアとサクソンという名で受け継がれていると考えています。アシュケナズの他の子孫はアルメニア地方にとどまり、ストラボンによるとサカセネと呼ばれているということです。

ゴメルのもう一人の息子はリファテで、ヨセフスは、パフラゴニア人（黒海南岸、小アジア北部にあった古代の国）の祖先と同じだと見ています。他の可能性としてはカルパチア人が挙げられます。ヨーロッパという名は元来、リファテのなまった語である可能性がわずかながらあるのです。

ゴメルの三人目の息子トガルマは、アルメニア人として知られている古代人の祖先であったことにほぼ間違ありません。アルメニアの伝説自体がこのことを主張しています。例えば、ユダヤのタルグームのように、ある人は、ドイツ人はトガルマに由来していると主張しています。トルコやトルキスタン（訳者注・旧ソ連

領中央アジア、中国、アフガニスタンにわたる広大な地域）も語源的にトガルマに関係があるかもしれません。ヤペテに戻って、名の挙げられている彼の二人目の息子マゴグを見えます。この名は「ゴグの地」を意味します。そして、この名はグルジアという今日もその名で知られている黒海の近くの地域を指している可能性が十分にあります。ヨセフスはマゴグ（またはゴグ）は、元来黒海領域に住んでいたスキタイ人の祖先だったと言っています。

聖書では、マゴグは通常、ヤペテの他の二人の息子、メシエクとトバル（特にエゼ三八・二）とかかわりがあります。メシエクは明らかに、ロシアの以前の名「ムスコビイ」と「モスクワ」に受け継がれています。トバルはアッシリア人の記念碑にチバレニイとして知られ、おそらく、現代ロシアのトボルク市に受け継がれています。エゼキエル書三八章二節では、「ロシュ」（英欽定訳では「chief」と翻訳されている）と関連づけられており、現代のロシアの名はロシュから出てきました。それゆえ、一般的に言うところ、これらヤペテの三人の息子たちマゴグ、メシエク、トバルは現在のロシア人の祖先とみなすことができます。

多くの専門家によると、マダイはメデスの祖先です。彼らは今日のペルシアに移動し、セム系エラム人とともにペルシア人の祖先ともなったのです。このヤペテ族を通してアーリア族が出現したようで、後にインドに移住し、インド人の祖先となりました。

ヤワンの名は、ギリシアと同じでイオニアの原型であることははっきりしています。同じことばが、旧約聖書のある所でヤワンと訳され、他の所ではギリシアと訳されています。ヤペテと息子ヤワンはギリシアの建国の祖と考えられています。

ヤワンはエリシャ、タルシシュ、キティム人、ドダニム人の父として挙げられています。「ヘラス」は「エ

リシャ」の一型です。ヘラスは全体としてギリシアに当てはめられるようになりました（ヘレスポント、ヘレニストなどに注意）。「イリアド」（ホメロスの作と伝えられる戦争の叙事詩）はアイレシアの人々に言及しています。テル・エル・アマルナの石板やウガリット石板は、キプロスから来たと思われる人々アラシア人に言及しているのです。

タルシシュ人はスペインのタルテッソーと、また北アフリカのカルタゴ人と同じとみなされてきました。しかしながら、また、これら両者はフェニキア人の町であり、フェニキア人はカナン人でした。タルシシュの子孫がスペインや北アフリカ初期の植民者で、フェニキア人はその後、彼らよりも多く増え広がって目立つようになった可能性があります。

キティムはほぼ確かにキプロスの別名であり、ある意味では同時にギリシア本土を指している可能性があります。マケドニアの名は「キティムの地」（マ・キティム）という語に由来しているのかも知れません。

ドダニムは歴代誌第一、二章七節のロダニムと明らかに同じです。彼の名は、おそらく、今日、ダーダネルス海峡（マルマラ海とエーゲ海を結ぶ海峡）とロードス（エーゲ海のトルコ南西海岸にある島）という地名に受け継がれています。

ヤペテの最後の息子ティラスは、ヨセフスによるとトラキアの祖先になりました。ティラスは、イタリア西部にあった古い国エトルリアを起した可能性があります。

一〇章五節 これらから海沿いの国々が分かれ出て、その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった。

前述の同定の幾つかは確かではありませんが、これらは筋が通っていると思われる。いずれにせよ、ヤペテの子孫がヨーロッパ全土に広がり、一つの大きな流れがペルシア、インドに向かったことを認め得る明瞭かつ十分な証拠があります。

異邦人という用語が当てはめられたのは、特にヤペテの子孫に対してです。彼らが散り広がった島々、海沿いの国々と他の地方は、バベルで起こった離散に伴って、別々の集団に分けられました。こういうわけで、このような言及があることは、一〇章が離散の後に書かれたことを示しています。このことは、さらに、「言語に従って」分かれた事実で証明されます。前述したように、ヤペテ人は知的で哲学的な精神の持主でした。この事実が、後に、ヨーロッパを哲学と科学の発展の中心地としました。

一〇章六節 ハムの子孫はクシュ、ミツライム、プテ、カナン。

次にハムの子孫について述べられています。ハムの子孫はヤペテの子孫よりもいくらか詳しく取り扱われています。ヤペテの息子については、ゴメルとヤワンの二人の息子しか挙げられていませんが、ハムに関しては息子たちのうちクシュ、ツライム、カナンの三人について挙げられています。また、セムの五人の息子のうち、ただ二人のアラムとアルパクシャデの名だけが挙げられています。なぜ、これらの人々が選ばれて、ヤペテの息子の五人、ハムの息子の一人、セムの息子の三人という多くの息子たちの子孫が除外されているのかは明らかではありません。著者がこれらの表をまとめた時、残っていた記録はこれしかなかったのかも

知れません。彼がこのように選択した理由をこれによって説明できるのかも知れません。少なくとも、セムの子孫が五世代にわたって挙げられていることから判断して、この部分を記録にまとめたのはセム系の人々だったと思われます。ヤペテの子孫は二世代までで、二例挙げられていて、ハムの場合も三世代まで二例だけ挙げられています。

このように記されている名は、離散後の主なる種族や民族の起源を明らかにするのに十分であり、したがって、他の名を挙げる必要はないと著者がおそらく判断したからでしょう。もう一つの可能性として、一〇章に記されている名は、ことばが乱された運命の時にバベルに実際に住んでいた家族であったということですが、五節、二〇節、三一節にでくるそれぞれの国語とは、ここに名の挙げられている人々が、少なくとも、バビロンの離散で分かれたか、または、家族の発達につれて直接影響を受けたかを示しているのでしょうか。

ハムの息子はクシュ（おそらくクシュと同じ）、ミツライム、プテ、カナンでした。聖書では「クシュ」はエチオピアと同じで、通常、エチオピアと訳されています。クシュ人は最初、南の方のアラビアに移住し、それから、紅海を渡って現在エチオピアとして知られている地に移住したと思われる。テル・エル・アマルナの石板では、この地は「カシュ」と呼ばれています。

ミツライムは今のエジプト人の祖先で、聖書では通常エジプト人を指して用いられています。エジプトはハムの地とも呼ばれています（詩一〇五・二三など）。それはハムが息子ミツライムとともにナイル地方に最初に移民として入植したことを意味しているのでしょう。ミツライムという名は複数形ですから、正確に言えば、ミツライムはもともと彼の名でなかったかも知れません。ある著者たちによると、半ば伝説になっているエジプトの最初の王朝の設立者メニスはミツライムと同じだったと述べています。

プテは聖書ではリビアと同じで、エジプトの西で北アフリカの地域に当たります。歴史学者ヨセフスはプテとリビアが同一であることを確認しました。もちろんカナンは、カナン人の祖先であり、後に、自分の名をつけ、カナンの地としました。

一〇章七節　クシュの子孫はシェバ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカ。ラマの子孫はシェバ、デダン。

クシュの息子たちのうちシェバ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカの五人の名が挙げられています。シェバは、南西アラビア地方から紅海を渡って、今日、スーダンと呼ばれている地に移住した人たちの一人で、彼らはシェバと呼ばれています（イザ四五・一四）。シェバの子孫と幾人かのシェバと呼ばれている人々の子孫との関係ははっきりわかりません（創一〇・七、一〇・二八、二五・三）。シェバ人とよばれている人たちは、アラビアにもアフリカにもいます。歴史学者ヨセフスは、サバという都市を北エジプトのメロエと同じものとして取り扱っています。

ハビラ、サブタ、サブテカの三人とも、アラビアに住んでいたと考えられています。一〇章二九節のハビラはセム系でヨクタンの息子です。サブタはアラビアのサブタという古代の都市と同じものとされています。ラマもアラビアに移住しました。しかし、彼はシェバとデダンの父として特別に記されています。クシュの息子たちのうちラマの息子たちの名だけが挙げられています。おそらく、当時シェバとデダンは特に有名だったことでしょう。こう考えると、後に、ケトラを通してアブラハムの孫たちのうち二人が、彼らにちなんでシェバとデダンと名づけられたことでしょう。

一〇章八、九節　クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の権力者となった。彼は主のおかげで、力ある獵師になったので、「主のおかげで、力ある獵師ニムロデのようだ。」と言われるようになった。

クシュと彼の他の息子たちは、アラビアとアフリカの南と西へ移住したけれども、ニムロデという彼の一番有名な息子は、三人のノアの家族の残りの者たちが、ことばが乱されたためやむなく去って行かなければならなかった後までメソポタミア地方チグリス・ユーフラテス川流域に住みついていた。ニムロデはおそらく、未っ子だったのでしょう。ですから、彼は特に、カナンというおじさんに親しみを感じたことでしょう。このカナンは、ハムの末っ子であって、ノアの呪いを直接に受けた者です。

ハムの長子クシュは、年月が経つにつれてますますこの呪いに反感を強くしたことでしょう。ニムロデが生まれた時、その反感はさらに強くなり、「我らはそむこう」という意味の名を自分の息子につけました。推測によると、クシュは、人に対する神の目的に反する計画を企て、ニムロデを子どものころから反逆グループの長となるように訓練しました。そして、クシュはニムロデを反抗の指導者となるように育て上げました。神は、彼らが永遠にセムとヤペテの子孫の奴隷になるように定めたのでしょうか。そうではありませんでした。それどころか、弘彼らは、支配するはずでした。こうしてクシュは、おそらく、ハムとハムの他の息子たちの励ましを受けて、人々の間で支配力を得る闘争のためにニムロデを訓練したのでしょう。

こうしてニムロデは、「地上で最初の権力者となった」のです。そしてすぐハム人は皆——たぶん多くのセム人やヤペテ人が——このニムロデの影響を受け、彼の指導に従うようになりました。彼らは最後に、シメ

アルの肥沃な平地にとどまりました（シヌアルという地名は後にシュメールという地名と同じものを指すとされました）。それから、たくさんの街のある大都市をつくり始め、これが後に「バベルでの彼の王国」となりました。

ニムロデは「主の前で力ある専制的な支配者」になりました。彼は、人を捜し、自分の意思に従うように説得することをやめなさいという意味で「獵師」であつたのです。エルサレムのタルグムに次のように書かれています。

「彼は、主の前で、狩獵をすることにも邪惡にも力があつた。なぜなら、彼は人々の息子たちを捕える獵師だつたから。彼は人々に次のように言つた。『主のいましめを離れて、ニムロデの定めに従え。』それゆえ、『主の前で力あるニムロデは狩獵をすることにも邪惡にも力ある者である』と言われている。」

ニムロデの狩獵の力について書かれたのは、当時、獸はほんとうに危険だと思われていて、ニムロデは人々を野獸の危険から守つたので勇士の評判を得たという意味でしょう。聖書に書いてある通りに、後の世代には、彼は獵師としての評判があつてことわざになつたのです。家族のために食物として動物を捕えるのがうまいというだけでは、彼の名前はことわざにはなり得ないでしょう。

大洪水の後で、ノアの百年から二百年くらいで、動物の数は非常に多くなつたことでしょう。洪水の前に繁茂していた植物はどこにもたくさんあり、動物の餌は豊富だつたのです。しかし、洪水後の状態は非常に異なり、特に多くの大きな動物は生きるのが困難になつてしまいました。化石記録によると、大洪水による堆積物にも、洪水後の氷河期の堆積物にも、当時、非常に大きな動物がいたという証拠があります。動物は絶滅するまで、人に対して非常に危険だと恐れられていたのは当然のことでしょう。ですから、そのような

大きな動物を捜して殺すことのできる力ある人が勇士となり、人々の恩人としてたたえられたのです。そして、容易に大勢の人々を自分の意思に従わせることができたでしょう。

しかし、神の約束によると、すべての動物は人を恐れおののく（創九・二）であつて、人に対して動物は危険なものではなかつたでしょう。ですから、わざわざその動物を捜して殺したのは「主に反抗した」（創一〇・九の直訳）ことです。しかし、このことによつてニムロデはその評判を受けて、当時の世界の指導者になつていました。

一〇章一〇～一二節 彼の王国の初めは、バベル、エレク、アカデであつて、みな、シヌアルの地にあつた。その地から彼は、アシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフ、およびニネベとケラフとの間のレセンを建てた。それは大きな町であつた。

ニムロデはすばらしい能力と力をもつた人で、バベルを建てた人々の指導者であつたと思われます（創一一・四、八、九）。バベルはニムロデが王として支配した地方の首都になりました。神は人に人類の政治体系を確立するように教えました。ニムロデが作つたと想定されるような政府を神は意図していたとは思われません。ニムロデの作つたものは、バビロンを中心、とした町々の集合体からなる強大な帝国でした。

ニムロデが建てた町々には、シヌアルの地にあつたエレク、アカデとカルネもありました。ウルクとも呼ばれていたエレクはバビロンの南東一六〇キロの所にあり、伝説によるとバビロン大洪水の物語に出て来る勇士ギルガメシュの故郷でした。エレクが発掘された時、アブラハムの時代よりはるか前の文書が見いださ

れました。アカデはバビロンのすぐ北にありました。アカデは記念碑にはアッカドとも、アガデとも書かれており、シュメール王国と本質的に同じアッカド王国にその都市の名がつけられました。カルネはこの町であつたかいまだにわかりません。しかも、シヌアルの地に、これらすべての町々があつたのです。シヌアルは、おそらくシュメールと同じで、後に書かれた聖書、例えばダニエル書一章二節などでバビロニアと呼ばれているのと同じとされています。

ニムロデはバベルを去ってアッシリアへ行き、そこで、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフとレセンの町々を建てました。バビロンはユーフラテス川に位置していたように、ニネベは北チグリス川上流に位置していました。ニネベはバビロンの北約三二〇キロの所にあり、後に、アッシリア帝国の首都になりました。バビロニアとアッシリアは共に、その後、セム人に征服されましたが、ハム人ニムロデはこれら両者の創設者であり、最初の皇帝でした。ニネベの二つの衛星都市レホボテ・イルとレセンは、まだはっきりと同定されてはいません。

しかしながら、ニネベから三十二キロ位のチグリス川のほとりにあるケラフは発掘されました。ケラフはその創設者にちなんで「ニムルデ」と呼ばれています。レセンはニネベとケラフの間にあつた非常に大きな都市と書かれています。したがって、これらの町々すべてを含む集合体は「巨大な町」、すなわち大都会と呼ばれました。アッシリアの伝説によると、ニネベの創設者は「ニヌス」という名の人でした。ニヌスはニムロデの一つの表現の仕方でしょう。

一〇章二三―一四節 ミツライムはルデ人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、パテロス人、カス

ルヒム人——これからペリシテ人が出た——、カフトル人を生んだ。

エジプトの創設者ミツライムの息子たちが次に挙げられています。人々の名すべては複数形の接尾語イムで終わっています。残念なことに、これら（ルディム、アナミム、レハビム、ナフトヒム）の多くは、まだ何を指すか定かではありません。彼らは、一〇章が書かれた当時、エジプトにおいて、またはその近郊において明らかに主要な民族でした。おそらく、彼らは、後に、南や西へと動きアフリカの他の地域へ移住しました。

パテロス人はパトロス、すなわち北部エジプトに住みました。後に聖書の歴史上の記事でよく知られているペリシテ人は、カスルヒム人から出て来ましたが、彼らについてはよくわかりません。他のグループのカフトル人は聖書の中で、アモス書九章七節やエレミヤ書四七章四節でペリシテ人と同じ人々とされています。一般の資料は、通常、ペリシテ人の起源をクレテ島とし、クレテのカフトルとしています。カスルヒム人とカフトル人の祖であるミツライムのこれら二人の息子は、家族が散り散りにならないようにし、クレテに移住し、さらに後に、順次、地中海の東岸に移住しました。そこは後にパレスチナとして知られるようになった地です。

一〇章一五節 カナンは長子シドン、ヘテ、

ハムの末息子カナンは子たくさんで、十一人の息子たちと人数ははっきりしませんが娘たちがいました。

長男はシドンで、フェニキア人の祖先でした。これはシドンの姉妹都市であるツロがつくられるずっと前に書かれました。

ヘテは確かにヒッタイト人の祖先（創二三・一〇）で、ヒッタイト人は八百年以上にわたって、小アジアを中心にした大帝國を支配していました。カナンにある兄弟たちの所から最初は移住して来たことでしょう。一五章一九～二二節によると、ヒッタイト人はアブラハムの時代、カナンの地に住んでいました。

そして、その後、小アジアで彼らの力は最強を極めていました。ヒッタイト人は、それから千年後のソロモンの時代にも、なお力を振っていました（Ⅱ歴一・二七）。

ヒッタイト人の帝國が最後に滅んだ時、生き残った人々が東方に逃げた証拠が幾つかあります。楔形文字の記念碑には、ヒッタイト人の名が「キッター」という名で書かれています。そして、彼らが東洋に住みついた時、このことは後に、「キャセイ（中国を意味する）」と修正されたかも知れません。考古学者は、ヒッタイト人とモンゴル人との多くの類似性を記しています。例えば、鉄を精練し、鑄造する才能にたけており、ウマの育種と調教にもすぐれた開拓者であつたことがわかっています。

一〇章一六～一八節 エブス人、エモリ人、ギルガシ人、ヒビ人、アルキ人、シニ人、アルワデ人、ツエマリ人、ハマテ人を生んだ。その後、カナン人の諸氏族が分かれ出た。

イスラエル人がカナンに入った時、そこに住んでいたカナン人の祖先は、カナンの他の九人の息子たちでした。エブス人は、おそらくエブスの子孫で、古代エルサレムの住民でした（ヨシ一五・六三）。エモリ

人は最も大きな部族の一つであり、エモリという名はしばしばカナン人の代表として使われました（創一五・二六）。アマルナの手紙は、彼らの部族をすべてアムールと呼んでいます。

ギルガシ人は、しばしば聖書に出て来ますが、彼らが後に居住した所はわかりません。ヒビ人もしばしば聖書に出ており、ヒビ人のいくつかの都市はシドンからエルサレムに至る間で考古学者に同定されています。アルキ人たちは、シリアのテル・アルカ地方に住んでいたようです。アルワデ人は、アルワドというフェニキアの港町に住んでいました。そして、ツエマリ人は、アマルナの手紙によると、そのアルワドの町の十キロほど南にあるスムルという町に住んでいました。今日、スムルはスムラと呼ばれています。ハマテ人は、シリアの大きな都市ハマテに属していました。ハマテという町は、聖書の後の記述にしばしば出てきます。シニ人は非常に興味深い存在です。彼らは、カナンの小さな部族だったかも知れません。しかし、その名は、他の聖書に出てくる名、例えば、シンの荒野、シナイ山、シニムとよく似ているので、一般に考えられているよりも大きな影響を与えていたでしょう。

古代の多くの部族は、祖先崇拜に傾いて行きました。事実、彼らは祖先を神としました。当時の神々のうちに、「シン」という名が出てくることはそのことを表わしているでしょう。アッシリアの神の最も重要なものの一つは「シン」という神でした。「シン」と名づけられたこのカナンの息子は、大変有名な人であり、カナンの広い地域に自分の名を与えたばかりでなく、カナン人のシュメールⅡアッシリア地域の居住地にも大きな影響を与えたことでしょう。ウルで発見された記念碑によれば、神とされた「シン」は人間のうちに「律法と正義」を確立したと書かれています。

極東に「シニム」という人々がいると聖書に記されており（イザ四九・一二）、宗教とは関係のない極東の

古代歴史に、「シナ人」という人々がいたことが記述されているのは、少なくとも、シンの子孫がカナン南部へ移住した一方、シンの子孫の幾人かが極東に移住した可能性を示唆しています。中国の人々は、物事を表現することの前に「シノ (Sino-)」という接頭語をつけて自分の国を表わしています。例えば、Sino-japanese War Ⅱ。日中戦争、Sinology Ⅱ 中国の歴史学などは実に意義深い言葉です。「シン」(秦)という名は、しばしば中国人の名にシアングという形で、またはそれによく似た形で出てきます。

証拠ははっきりしていませんが、諸民族の系図 (The Table of Nations) に記されている名の中で、カナンの二人の息子ヘテ (ヒッタイト Ⅱ キッテ Ⅱ キャセイ Ⅱ 中国人) と、シン (シン人 Ⅱ シナ人 Ⅱ チャイナ Ⅱ 中国) が東洋人の先祖になったことは、一番ありそうなことです。神の靈感によって、人類発展の主な流れのすべての祖先に関するこのような系図に神の靈感が含まれていると解するのは、筋が通っていると思われるます。したがって、モンゴリアン (東洋人) やアメリカ・インディアンも、大部分がハム系であるという結論を出してもおかしくないでしょう。

聖書は、カナンから出た民族の名を記述してから、「カナン人の諸氏族が分かれ出た」という意味あることを伝えていきます。ヘテ人 (ヒッタイト) は小アジアに広まりました。おそらく、シン人は中国へ広まったでしょう。その残りのカナン人たちもどこかに広まったことでしょう。右の聖書のことばで「分かれ出た」は、カナン人についてだけ言われていますので、他の部族 (民族) よりも広く散らされたことを示唆していることでしょう。カナン人はアジアに向けて北へ、東へと散らされて行つたと考えれば最もよくわかるでしょう。そして、ついに氷河期にアメリカ大陸と陸つづきになっていたベーリング海峡を渡り、北アメリカや南アメリカに散らされて行つたのです。

一〇章一九と二〇節 それでカナン人の領土は、シドンからゲラルに向かつてガザに至り、ソドム、ゴモラ、アデマ、ツェボイムに向かつてレシャにまで及んだ。以上が、その氏族、その国語ごとに、その地方、その国により示したハムの子孫である。

諸民族の系図が編集された時 (それとも、モーセが自分の時代の人々にカナン人を示すために後に挿入したのかもしれませんが)、カナン人の境界は、フェニキアの北の海岸にあるシドンからゲラルまで下り、南の海岸にあるガザ (ペリシテ Ⅱ パレスチナ) まで、それから死海と「平野の四つの町々」、すなわちソドム、ゴモラ、アデマ、ツェボイムに至る東南地方にまで広がりました。この記録が書かれた当時、これら四つの町はまだ滅ぼされていませんでした。ラシャという都市は、多分、北東の境ですが、その場所がどこであったかはまだはっきりわかりません。その地域は広い場所ではありませんでしたが、そこから「カナン人の諸氏族が分かれ出た」のです。

こうして、ハムの子孫の記録は、ヤペテと同じように「その氏族、その国語ごとに、その地方、その国により」分けられたと述べて、まとめられています。こういうわけで、一〇章はバベルの塔の事件の後で書かれたことが分かります。なぜなら、バベルの前には諸国語はなく、全地はただ一つのことばだけであり、言語の差はなかったからです。さらに、この「ことば」による分割は家族に應じてなされ、家族が生活し働く所が彼らの領地 (地所) となり、最終的にこのような家族群が国家となったと考えられます。

ベレグの時代

長兄ヤペテと弟ハムから分かれ出た主な諸氏族を挙げてから、セムは、彼自身の家族について記しています。セムは、彼の家系が、まことの神に関する知識と後世に神の約束を伝えるために選ばれた一つの民となることをノアの預言（創九・二六）から知っていました。セムは、自分の子孫に関しては、十五代まで挙げているのに、ハムの子孫は三代までで、ヤペテの子孫は二代までしか挙げていません。

セムは親戚の多くの人々との接触を失ったと思われます。言語が乱され、人々の大移動がなされた後はなおさらのことです。最も可能性の高いことですが、もしセムの三代目の孫ペレグが生まれる少し前にこのことが起こったとするなら、ペレグという名がつけられた理由が容易に理解できます。父の家族の多くがバベルへ移動したのに、セムはおそらくそうしなかったことでしょう。バベルの事件のずっと後まで、おそらくノアが死ぬまで、セムはノアの近くにとどまったことでしょう。その後晩年になって、最終的にペレグの近くに移り住んだのでしょう。

一〇章二二節 セムにも子が生まれた。セムはエベルのすべての子孫の先祖であって、ヤペテの兄であった。
（長兄ヤペテの兄弟・英欽定訳）

まず、セムは「エベルのすべての子孫の先祖」であることが分かるというのは興味深いものです。この部

分が書かれた時代に、その地方ではエベルの子らが最も良く知られていたのでしょう。したがって、この名が書かれていることは、この記事にさらに関心が付け加えられるのです。ヘブルという語が明らかに由来すると思われるのは「エベル」からです。例えば、アブラハムはエベルの子孫であったことを示して、ヘブル人と呼ばれていました（創一四・二三）。それゆえ、これら初期の聖書は、この用語はアブラハムの子孫だけにとより、もっと大きなグループの人々に適用されていたことを明らかに示しています。ある考古学的碑文に「ハビル」と書かれている人々はイスラエル人ではなく、エベルの子孫の他の部族であったことを示すいくつかの示唆があります。

セムは、他の兄弟ハムには一言もふれないで、「長兄ヤペテの兄弟」として自分自身を紹介しています。これは、おそらく、九章二七節の父の預言でヤペテと直接のつながりがあったからでしょう。そうでなければ、兄に対する敬意のしるしであったことでしょう。

後世の訳本の幾つかは、この点では英欽定訳を拒否しています。そして、この節を「セム、ヤペテの兄」と訳しています。しかし、マソラ本文は英欽定訳に近いのです。そして、その方が前後関係を含め全体的に見るとよりよく当てはまります。セムは洪水の九十七年前に生まれた（創五・三二、一一・一〇）を比較のこと、に、ノアの三人の息子たちのうち最初の子は洪水の百年前に生まれているのです（創五・三二を創七・一一と共に検討のこと）。

一〇章二二節 セムの子孫はエラム、アシュル、アルパクシャデ、ルデ、アラム。

セムの五人の子どもの名エラム、アシュル、アルパクシャデ、ルデ、アラムが挙げられています。エラムはエラム人の先祖で、聖書にも石碑にもよく出て来ます。エラムの王ケドルラオメルは、創世記一四章四、五節にあるように、アブラムの時代にカナンに侵入した連合軍の指揮者だったようです。メソポタミヤの東にある古都スサ、別名シュシャンは彼らの首都でした。エラム人は、他の人々、特にマダイの子孫すなわちヤペテの子孫であるメデスと共に、後でペルシア帝国を造りました。

アシュルは明らかにアッシリアの設立者でした。しかし、一〇章一節に書かれているように、ニムロデと彼につき従う者が、後に、アシュルの地に侵入し、そこに、あとで首都となったニネベや多くの町々を築きました。したがって、アッシリアの人々と文化は、セム系民族とハム族（バビロン人）の文化、言語、宗教の混じり合ったものでした。アルパクシャデに関しては、アブラハムの直接の祖先であったこと以外はほとんどわかりません。アッシリアのアラパキアとして知られている地方は彼の名に由来しているのかもしれませんが。

少なくともヨセフスによると、ルデは、小アジアに住むリュディア人の祖先でした。しかし、同じ名が一〇章一三節にハムの子孫として挙げられています。

五番目の息子はシリア人と同じアラム人の祖先アラムでした。これらの人々も偉大な民族となりました。彼らのアラム語は、最終的にアッシリアやバビロニアを含む古代世界の著名な国々の共通語として採用されるようにさえなったのです。旧約聖書のダニエル書やエズラ書のある部分は、もともとアラム語で書かれたようで、キリストの時代にはユダヤ人の間ではアラム語が話しことばになっていました。

一〇章二三、二四節 アラムの子孫はウツ、フル、ゲテル、マシユ。アルパクシャデはシエラフを生み、シエラフはエベルを生んだ。

セムの三人の子どもたちの名については何も記載がないのに、アラムの四人の息子の名が挙げられています。おそらく、アラムの子どもたちは、初めのうち他の人々よりもアブラハムの子孫とより深いつながりがあったのでしょう。これらの四人については少しわかっています。ウツは明らかに自分の名をアラビアの一地域の名にしました。この地方は、後にヨブの故郷となりました（ヨブ一・一、エレ二五・二〇）。他の三人すなわちフル、ゲテル、マシユの名は後の代には知られていませんが、セムからモーセの時代には、明らかに重要でした。

セムの息子のうち最も重要な人はアルパクシャデで、彼自身については知られていませんが、彼の名は約束のすえの系図に出て来ます。アルパクシャデには一人以上の息子がいたと思われますが、シエラフの名だけが挙げられています。これも約束の子孫に至る祖だからでしょう。同様に、シエラフの息子ではただ一人エベルが挙げられました。エベルの名の重要さはすでに簡単に吟味した通りです。

一〇章二五節 エベルにはふたりの男の子が生まれ、ひとりの名はペレグであった。彼の時代に地が分けられたからである。もうひとりの兄弟の名はヨクタンであった。

この節は、セム系の民族の系図で最も興味深いところです。エベルにはペレグとヨクタンという二人の息

子があり、ペレグが選民の系列に入るセムの子孫でした。ヨクタンについては次の二六節から三〇節にかけて記されています。

ペレグは、もつと適切な言い方をすれば、その名に関連した出来事の方が、今日、大変興味があります。「彼の時代に地が分けられた。」

明らかに、この出来事は非常に注目すべき出来事でした。そこで、エベルはその出来事を記念して、息子の名としました。ペレグという名は、「分割」を意味します。ペレグがペラスギ人として知られている人々の祖先である可能性があります、これ以外にペレグ自身について知りうることや興味をそめることはまったくありません。大問題は、ここで示されている地球の分割の意味にかかわることです。

この節の最もありふれた解釈は、一一章に書かれている、バベルの塔での人々の分割でした。このような分割に関することが一〇章五節（「これから海沿いの国々が分かれ出て、その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった」と）、一〇章三二節（「以上が、その国々にいる、ノアの子孫の諸氏族の家系である。大洪水の後にこれから、諸国の民が地上に分かれ出たのであった」）に述べられているのは大切です。これらの節は、実際に大陸が分割したということではなくて、明らかに言語学的、地理学的分割に關しているようです。このことは、五節での分割が「ことばに従って」と書かれていることから特に明らかです。

ハムの孫でノアの曾孫ニムロデは、セムの孫でありノアの曾孫エベルと同じ世代の人でした。こういうわけで、ニムロデとエベルが成人であった時、バベルのことばの乱れが起こったと推論することは理にかなっています。もし、離散したの間もなくペレグが生まれたとするなら、エベルが息子の名にこのように非常に重大な出来事を記念として残したことは当然でしょう。そうでなければ、諸民族の系図にある他の名には、

このような説明はなされていませんから、著者がなぜペレグの意味を記すようなめんどろなことをしたか理解できません。

一〇章二五節でペレグの名と関連した節で用いられた「分けられた」（ヘブル語はパラグ）という語は、五節と三二節に用いられた語「分かれ出た」（ヘブル語パラド）とは異なります。そして、このことは、異なる二種類の分割が考慮されたことを意味している可能性があるのです。しかし、ヘブル語の権威者たちは、これら二つの語は本質的に同じ意味の語だと言っています。

もし、地球がかつて一つの陸塊であり、何らかの理由でばらばらになり、その陸片が徐々に離れて現在の大陸を形成したことが証明されるなら、この節は実質的にこのような出来事に関係ありと理解してよいと思われまゝ。現在、大陸移動の問題は、学者間になお議論の余地があります。そして、創造論に立つ科学者たちは、この大陸移動説に未解決の多くの物理的に困難な問題があることを指摘しています。

いずれにしても、地球のあちらこちらに遠く離れた土地に現在見いだされる人口集団を説明するために大陸移動説を主張する必要は全くありません。ノアの洪水後何百年にもわたり地球の水の多くが大陸氷河となつて凍っていた氷河期には、海面の高さが今よりはるかに低く、ベーリング海峡やマレーシア海峡が陸橋になつてつながっており、民族の移動がここを通して行なわれたと思われまゝ。さらに、古代の人々も、海を渡る大型の船の造り方を知っていました。彼らの祖先ノアは箱舟を建造したくらいですから。そういうわけで、彼らにとって大陸から大陸へと水路を通つて旅行するのは容易でした。事実、古代の多くの証拠が、人が海を渡つたことを示しています。

しかし、ノアの洪水で「大いなる水の源」が「はりさけ」た時、地殻の下に蓄えられていたものすごい量

のエネルギーの大部分が解放されましたが、地殻の下になお残っていたエネルギーが、大陸を離れさせ移動させるのに要した途方もない力を提供したのであって、さらに、それがバベルの塔と時を同じくして起こった可能性があるので。

もし、このことが起こったとするならば、分離の速度は初めは速く、徐々にその速度が遅くなり、今日の知覚し得ないくらいの動きになっていったことでしょう。

問題はまだ未解決ですが、この節で取り扱われている分割は、バベルのことばの乱れに直接起因した単なる地理的な分割であつたというのが最も可能性が大ですが、特に、陸地がいくつかの陸塊に分かれる大激変のような、何かもっと重大なことであつたとするなら、一章でのバベルでの神のさばきの記事にそのことが述べられていないのはおかしいことです。

一〇章二六～三〇節 ヨクタンは、アルモダデ、シエレフ、ハツアルマベテ、エラフ、ハドラム、ウザル、ディクラ、オバル、アビマエル、シエバ、オフィル、ハビラ、ヨバブを生んだ。これらはみな、ヨクタンの子孫であつた。彼らの定住地は、メシャからセファルに及ぶ東の高原地帯であつた。

これらの数節は、ペレグの兄弟ヨクタンの十三人の息子たちの一覧表です。それらの名は主としてこの部分からだけ知ることができますが、彼らは皆アラビアに居住していたことを示しています。そのうちの二人の名、オフィルとシエバは明らかにアラビアに位置していました。オフィルは金の産地として有名な地方と関連しており、シエバはシエバ人と関連があります。他にシエバという名が、クシュの孫として、また、も

う一人アブラハムの息子として挙げられています。

ヨクタンの息子のすべての名が挙げられていて、ペレグの息子は一人も挙げられていない事実、この部分の著者であると思われるセムが、当時、ヨクタンの近くに住んでいて、セムの五代目の子孫の名よりもヨクタンの息子たちの名の方がもっと近い関係にあったことを示唆しているのかも知れません。いずれにしても、これらの名は、後世におけるよりもこれが書かれた当時、特によく知られていたのです。

一〇章三一節 以上は、それぞれ氏族、国語、地方、国ごとに示したセムの子孫である。

五節にヤペテの名が、そして二〇節にハムの名が挙げられているように、ここではセムの名が書かれてしめくくられています。ここでも、また、はっきりした家族単位とそれぞれの言語（したがって、これはバベルの事件の後）、それぞれの地方、最終的に実際の民族に分かれたことが述べられています。合計二十六のこのような諸民族がセムに由来するものとして挙げられ、一方、ハムに由来する民族は三十ほど挙げられています。しかし、編集者モーセが一四節に挿入したと思われるペリシテ人は含まれていません。また、ヤペテに由来する民族はわずか十四しか挙げられていません。こうして、これら全体で七十の太古の諸民族は、セムによって諸民族の原本に挙げられています。

一〇章三二節 これらはノアの子らの氏族であつて、血統にしたがつて国々に住んでいたが、洪水の後、これらから地上の諸国民が分れたのである。（協会訳）

ヤペテ族、ハム族、セム族というように、それぞれの由来に基づいて、諸民族のリストが個別に挙げられた後、最終的なまとめの節が付随し、これらは洪水後の全世界に住みついた最初からの居住者であったことを再び強調しています。「系図」（ヘブル語トーレ・ドース）ということばがここで用いられています。同じことばが二・四、五・二、六・九、一一・一〇、一一・二七などで大きな区分をするために創世記の原著者によって用いられています。記述されたものか、セムの兄弟またはその子孫の口伝えによるものかのいずれかでしょうが、明らかに、彼が利用できる明確な系図上の記録が存在しており、それから彼は表を編集しました。セムはその系図の一部を、ノアの死に際して兄弟たちが一緒に集まった時、入手することができたのかも知れません。ノアの死で終わっている系図に「ノアの息子たち」の署名があることからおそらくこの再会を推論してよいでしょう（九・二九―一〇・一）。

この部分を閉じるに当たって、民族の著しい特徴に注意しましょう。すでに述べたように、これら「ノアの息子の家族」の名が七十も挙げられており、そして、「大洪水の後にこれらから、諸国の民が分かれ出たのであった」とあります。挙げられている名の数が実に不均衡に思われるので、他にも記入もれの人々がいた可能性ががあります。少なくとも、七十の数は象徴的意味で選ばれた可能性ががあります。

しかし、ここに七十民族が挙げられている事実こそ、後にユダヤ人の著者が、七十の数に執着するようになった理由だと思われます。この数は、カナンからエジプトへ行ったイスラエル人の数と同じです（創四六・二七）。後に申命記一〇章二節で、イスラエル人の数が増し、国として、実に神の選ばれた民としてエジプトから帰って来た時、モーセは人々にこのように訓戒しました。「昔の日々を思い出し、……いと高き方が、国々に、相続地を持たせ、人の子らを、振り当てられたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、国々

の民の境を決められた」（申三二・七―八）。

以来、七十という数はイスラエルの民と特別な関係を持ち続けています。こうして「あなたの民については七十週が定められている」（ダ二九・二四）、そして、イスラエルの歴史は、（二年を七として七十の七倍数というサイクルで繰り返していくという）枠組で理解できます（ヘンリー・M・モリス著 *Many Infalible Proofs* [San Diego: Creation Life Publishers, 1974], pp321-324）。イスラエル人は七十人の長老たちによって導かれ（民一一・一六、二五）、後に、ユダヤのサンヘドリンを構成する人の数は七十人とされました。七十人の学者たちが旧約聖書をギリシア語に翻訳し、七十人訳聖書を完成させました。また、モーセは、詩篇九〇篇一〇節で、人の齢は七十年と書きました。バビロン捕囚は七十年続き、ヘロデがユダヤ人の救い主が幼い子どもであった時、イエスを殺そうと企ててから約七十年後、エルサレムとヘロデの神殿はローマによって壊滅されました。

バベルの塔

創世記二一章は、ノアの洪水とほぼ同じくらい重大な出来事を取り扱っています。ノアの洪水の影響は全世界に及びました。そして、人に関する限り、少なくとも言語の乱れは全世界に同様の衝撃を与えました。

その時から幕が引かれたままですが、サタンは幕の内側で精力的に働きつづけていることを疑うことはで

きません。サタンはハムの性格の致命的弱点に実にうまく取り入って有利な立場に立ちました。そして、間もなくハム族全体の、特にニムロデの忠誠を獲得しました。

ローマ人への手紙一章一八―三二節に、ニムロデと彼の追隨者がもたらした道徳的霊的墮落が生き生きと描写されています。まことの神である造り主に関する知識と礼拝を意識的に避け、その代わりに造られたものを拝みはじめました。このことは間もなく人々を汎神論と多神論と偶像礼拝に導きました。この新しい宗教体系のどれがサタンとの直接的コミュニケーションによって生じたかわかりません。しかし、聖書によりないあらゆる宗教形態がそもそも古代バビロンの宗教に由来しているのであり、この証拠がたくさんあります。ローマ、ギリシア、インド、エジプトや他の諸民族のいろいろな神や女神と、バビロンの初期のパンテオン（神々を祭った神殿）が本質的に同じであることは十分に確かめられています。ニムロデ自身、後に、メロダク、またはマルダクとしてバビロンの主神として祭られました。

これら異教の神々は、天の軍勢である星や惑星、その中心を占めている太陽崇拜と同じものとされています。この系は多くの星座と共に十二宮にまとめられました。これは古代諸民族すべてが持っていた最も注目すべき星座でした。そして、天の星図と神殿にあるそれらの石や金属で現わされている星図は共に、外見上「人や鳥や四つ足の獣やうもの」の像で、その後真の「天の軍勢」、すなわち、ルシファーであり明の明星である天使や悪魔の軍勢がひそんでいました。

これら多くの反逆した天使たちはすでに地獄（タルタロス）に投げ落され、さばきの日まで暗黒の鎖につながれています（Ⅱペテニ・四）。なぜなら、第六章一―四節にあるように、彼らはノアの日の人々を墮落させようとして参加した天使たちだからです。しかし、大いなる軍勢は、エペソ人への手紙第六章一二節にあるよ

うに神の働きと神の民に反対し、自由に活躍しつづけています。サタンとその軍勢の主な攻撃は、常に人々を欺く働きです。黙示録一二章九節および一三章一四、一五節にあるように、サタンはまことの造り主なる神以外の何かを拝むように全世界の人々を惑わす存在です。

サタンは改革者というより、人を墮落させる働きをするものとして悪名高い存在です。それゆえ、占星術的象徴と複雑な神話や奇跡を伴う異教の制度は、創造と宇宙の贖いの約束に関する神の真の啓示を初めからねじ曲げるもののなのです。こうして、星座の十二宮はもともと洪水前の族長たちによって考案されたもので、天自体を彼らに印象づけることによって人類の良心に、神の約束を消すことのできないように刻み込む手段として用いられたのです。もし、そうだとすると、占星術に源を発した制度は、元来、しるしと季節のために役立つ天体が持っていた初期の福音的意義からの大きな墮落です。いずれにしても、ニムロデとその追隨者が解釈したように、天体は間もなく占星術に用いられただけではなく、降霊術とその他すべての異教信仰と偶像崇拜の悪の根源となりました。

さらに、偶像とサタン礼拝の発展は、一つの政府の下に全人類をまとめようとする企てを持っていました。その政府は、神が人に責任を委託するようにノアに伝えた神による政治体系ではなく、むしろ反逆者ニムロデの下における独裁制でした。後でわかるように、ニムロデは軍隊による独裁制を設置しただけではなく、数の少ない祭司たちによる少数独裁制を確立し、その中でニムロデ自身は大祭司となり、後に、主たる礼拝の対象となりました。王姫セミラミスは古代の伝説上の人物として有名で、ニムロデの妻であり、陰謀の実際の指導者でもありました。これらのことを示唆する証拠がいくつかあります。

バビロンは黙示録一七章五節によると「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母」で、原初のバビロンの

宗教体系は、キリスト教以外の全世界にあるすべての宗教の根源となったばかりでなく、キリスト教界にも侵入し、驚くほど墮落させてしまいました。このことは外面的儀式主義と偶像崇拜を起こしただけでなく、教育と政治の中心に浸透している進化論に立つ汎神論的ヒューマニズムの哲学を起こしました。(ヘンリー・M・モリス著 *The Troubled Waters of Evolution* (San Diego : Creation-Life Publishers, 1975) pp.25-76)

「生めよ。ふえよ。地に満ちよ」(創九・一)のことばは、ノアの息子たちに対する神の命令でした。秩序正しくこのことを成就するために、神は人の政府の原則を制定されました(創九・六)。このことは、明らかに将来の人口を適切に制御できる社会単位、すなわち、諸国家に分かれて実施されるはずだったと思われる。各家族単位が国になって行くのと同じように、組織化された各々の国は、全体としてそれぞれの国のやり方で、人の共同生活を打ち立てるはずでした。

各々が勤勉に働き、お互いに貢献し合うことにより物的報酬をもたらし、その結果、各人もその家族も利益を受けるはずでした。このことは国の段階で利益を受けると同時に、全体として人類の益のために重大な貢献となりました。このように国として承認され報酬を受けることは、勤勉と忠実さをもつて奉仕する上で最も効果的な原動力となることは明らかです。この原理は、人の性質の中に深く刻み込まれているようで、神ご自身も承認しておられます(Ⅰコリ三・一四、黙二二・一二)。

もし、個人でもグループでも、不正直な方法で他に対し利益を得ようとするなら、このような者を罰するために、神がお立てになった政府の権力が彼らに罰を与えるはずでした。神に対する個人的、また共同の責任意識を強くし発展させるため、このような社会のしくみが最も助けとなるはずです。また、神の恵みに対

して最も大きな感謝の気持を奮い立たせなければなりません。そして、神の恵みは、八章二二、二三節にあるように、肉体的生命を維持するための神の摂理に基づく条件と、神の究極的贖いと救いの約束に現わされていました。

しかし、現実には、そうではなく、一般の人々は、この神の備えた計画に喜んで従うのを拒みました。したがって、神は特別に介入され、計画を遂行されなければなりませんでした。人がふえ始めた時、多くの単位に分かれて生活する代わりに、彼らは一つの単位でいっしょに生活することを好みました。

一章一～二節 さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。

人々が厳しい条件のアアラテ地方から東方(または南方)へと移住するにつれて、彼らはいよいよシヌアルの地、肥沃なメソポタミア平地にやって来ました。彼らはそこに定住し、町を建てることに決めました。おそらく、その地方は、彼らに洪水前のふるさと思ひ起こさせたことでしょう。そして、彼らはエデンの園の状態を回復できるかもしれないと考えました。

なぜなら、彼らはかつて園から流れ出ていた二つの川の名にちなんで、そこにある川にチグリスとユーフラテスと命名したからです。

もちろん、ノアのすぐの子孫は、みな同じことばを話していました。それは、洪水前の人々のことばと同じでした。バベル以前の人名や地名は、すべてヘブル語で、その同系のことばだけに意味がありました。お

そらく、これはセム語（ヘブル語）だったと思われます。また、多分、セム族はバベルの反逆に荷担していなかったと思われます。それで、セム語だけは、言語が乱されなかったのかも知れません。したがって、セムの家族は、彼らが常に話していたのと同じ言語を話し続けたことでしょう。

人の話し方と言語の能力は、人類に備わった最も驚くべき属性です。進化論者は、動物のペチャクチャしゃべりと人の言語との間に横たわる橋渡しすることのできない大きな隔たりを全く説明できないでいます。人が、真に人であることはことばによります。この比べようのない基本的なことばの神髄は、神の啓示―神の子とば―を通してはつきり示されています。キリストご自身が生きたことばです！「神は、……御子によって、私たちに語られました」（ヘブ一・二）。これこそ、まず第一に神と人とのコミュニケーションが可能なために、そして二次的に、人が話をしたり聞いたりして、お互いに意思の伝達ができるように創造された真の理由がここにあったと言っても過言ではありません。しかし創造主に対して反逆するために、人々が共同する目的でこの神の賜物を用い始めた時、最もふさわしいさばき方で、神は彼らのことばを乱され、こうして人は互いに離ればなれにならざるを得なくさせられたのです。

全地の人々は、元来、「一つの言語、一つの話しことば」であつたと書かれています。または、文字通りに言えば「一つの唇で一種類のことば」であり、これは一つの発音と一つの語彙であつたことに明らかに関係があるでしょう。これは、明らかに洪水前の人々が用いていた共通語と同じでした。この語彙には、また、書きことばも含まれていたのは当然です。言語が乱された後、各々の民族は、新しい書字の体系をも作り出さなければならませんでした。欽定訳聖書によると、人々がアララテ地方から移住するにつれて、彼らは「東の方から」シヌアルの平地にやって来ました。シヌアルはアララテの南東ですから、彼らは最初、ずっと南

東に旅行したのかも知れません。おそらく、現代のペルシア地方、すなわち、アフガニスタン、それから向きを西方に変え、メソポタミアに行ったことでしょう。

しかしながら、ヘブル語でこの節の意味は確かではありません。そして多くの注解者たちは、「東方へ」と訳すべきだと考えています。いずれにしても、最終的に肥沃なチグリスユーフラテス平野に来てそこに定住するまで、人々はどこに住んでも満足できなかったようです。人口は間もなく増加し、彼らの心遣いがすべて食糧生産だけではすまない状況になり、都市国家へと発展し得るようになりました。

一章三節 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作つてよく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに渥青を用いた。

ニムロデはこの時まで、人々の指導者になっていたと思われます（創一〇・八一―一〇の説明参照）。確かに、彼は、新しい状況、すなわち特殊化して単に生きるための活動以上のことをすべき時点にあることがわかりました。この新しい状況は、実際に次の二つの過程のどちらかのチャンスを提供したことでしょう。

(1) 神の命令（創一・二八、九・一）に従つて組織的に植民地をつくり、地球全体を開発する。そして、各植民地は各々の政府を持つて、治める方法、または、(2) 強力な中央集権社会を確立し、資源と職業を支配し間もなく、全世界を同様に支配できる自給自立の文明を生み出す方法。

(2) の立場は、明らかにニムロデとその追隨者の反逆の目的によりよく役立ちます。そして、もちろん、同時に、見えないサタンの陰謀にも役立ちます。力強いすばらしい指導者の下に統合された自給自足の社会は、

もはや神に依存しない社会になることでしよう。これこそ、ニムロデの目標でした。

この節の意味は、バベルに定住してすぐ後、ニムロデは、その共同体の家長会を召集しました。種々の問題やいろいろの可能性を検討したのち、型通りの決定が下されました。「行つて（ヘブル語のヤハブ、通常は『与える』と訳されているので、おそらく、会議の決定を宣言する意味でしょう）、まず、私たちはれんが製造工場を作ろう。」川の流域では、耐久性のある建物を作る石を得ることは容易ではなかったのです。木材は彼らが考えていた永久的建物のためには耐久性の点で問題でした。しかしながら、粘土は、窯で適当な温度で処理すると、非常に丈夫なれんがを作ることができます。

古代の最もありふれた建物の建て方は、石と石との間に粘土をしっくい（モルタル）として用いる方法でした。エジプトやアッシリアでれんがが用いられた際、れんがはただ太陽熱で乾燥させただけでした。バビロンのれんがは、これらより丈夫で耐久性がありました。それで、聖書記者は、この点に注目しました。火で焼かれたれんがは石の代わりに用いられました。そして、モルタルの代わりに歴青（アスファルト）を用いました。この歴青は、チグリス・ユーフラテス川流域にあった豊富なアスファルト溜りからのものだったことでしょう。このように、窯で焼かれたれんがとアスファルトの建造物が古代バビロンでは一般的であったことが、考古学の研究でわかりました。

一章四節 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」

バベルで強靱な建物を持つ永続的共同社会をうち建てようという意志を示す決定を下してから、この新しい宣言文で紹介し示唆しているように、れんが工場が完成し、十分に生産をあげるようになった後で、また会議を召集し、「行つて述べよ、この決定は、われわれが町を建てる、特に、天に届く塔を建てるという決定である」と、公的に宣言したことをこの文は示しています。

この町は、無計画に、家や商店街が勝手に作られたというものではありません。都市センターは注意深く計画されたはずで、各々の構成部分は、最高の耐久力と有用性を持つようにデザインされており、複雑な都会活動で最も効率的に貢献するように計画されたことでしょう。

この大きな塔は、建築面でも、文化面でも市の中心でした。塔は、当時の住民の政治的、宗教的生活の中心であり、彼らの一致と力の象徴になるはずでした。

おそらく、この壮大な計画に不安を持ち、神がこのような指示を与えられなかったことを思い起こし、全地球を植民地化し、その資源を人にではなく神に栄光を帰するような方法で開発することが最も大切なことをニムロデに力説した少数の人々がいたことでしょう。少なくとも、ノアとセムはこの計画を是認しなかったでしょう。そして、彼らは、これら初代のバビロニアの人々に何らかの影響を及ぼしたと思われます。

一章一一、一二節によると、アッシリアに植民地をつくるためのニムロデの遠征は、この少数派の意見を満足させるための試みであったのかも知れません。しかし、アッシュールはすでに自分の居住地をそこに持っていたので、ニムロデの遠征は、独立して広がって行くのを妨害する目的での侵略であったとみるのが適当なのかも知れません。

いずれにしても、中央集権主義の考えは強く、バビロンの大建設事業が始まりました。建設責任者たちは、

神の計画に関心がなかったのです。彼らの意図は、「われわれは……名をあげよう」ということでした。事実、彼らは、「全地に散らされるといけないから」と言って神の命令に反する彼らの目的を慎重に認めました。神の意志を知っているだけでなく、もし彼らを一地方に強力に統合し結びつけるように働く影響力がなければ、人間の基本的な傾向としての好奇心と独立精神は、彼らのうちの多くの人々に、世界の他の部分にある未知の地域を探検し、開発したいとの思いを起こさせたことでしょう。

偉大な指導者ニムロデに対する畏敬と賞賛の思いでさえ、彼らを一つにまとめるのに十分ではなかったかも知れません。ニムロデは、同時に強い宗教的動機も必要なことを知っていたに違いありません。その動機は、全地球を人で満たすように神が彼らに命じられたという人々の知識に打ち勝つのに十分な力あるものでなくてはならなかったのです。

バベルの塔は、この必要をも同時に満足させるために計画されました。バベルの塔は天に届くようには設計されていませんでした。比喩的な意味、すなわち、天において入手できる霊的な力を受けるためであったのかもしれない。「届く」ということばはヘブル語本文にはありません。彼らは、「天に至る塔」を築こうと思ったのです。つまり、塔は、天と天使たちにささげられました。

この計画は、おそらく、初めは真に霊的な装いをもって人々に示されたことでしょう。塔の荘厳さは、天におられる真の神の力と威厳を象徴したことでしょう。塔の先端にある大きな神殿には、人が犠牲をささげ、神を礼拝するセンターと祭壇があり、十二宮のしるしが美しく飾られた天井と神殿の壁に刻み込まれていたことでしょう。それは、洪水前の族長たちが語り伝えた創造と贖いの偉大な物語を表わしていました。

塔の印象的な美しさと神聖な目的について人々が推測したことは、全体としてこの計画が、神の命令に背

いており、この事実に対する代償を払っても、この塔の美しさと神聖な目的はなおかつ神を十分に喜ばせることが出来るということだったのでしょう。人間の弱さと神の救いを認めるよりも人間の業に栄光を帰することこそ目的とすべきだと考えたことでしょう。しかし、「聞き従うことは、いけにえにまさる」（Ⅰサム一五・二三）のです。カインが自分の手で作った美しく美味しい果実のささげものは、主に受け入れられませんでした。言うまでもなく、ニムロデの荘厳な塔は神に受け入れられなかったことでしょう。

ニムロデは、少なくとも自分がしていることをよく知っていました。しかし、だまされた人々も知っていたかもしれない。八節には、言語が乱された時はまだ町を建設している最中であつたが、塔はすでに使われていたことを示唆しています。ニムロデはそこで宗教的礼拝を行なったことは確かです。

しかし、みせかけの創造者礼拝は、ほんの短い間に、被造物の礼拝に陥ってしまいました（ロマ一・二一―二三、二五）。塔の荘厳さとデザインのきらびやかさ、その中にある什器一切の美しさは、人々の肉の欲に訴えました。そして、すぐ、「礼拝の補助手段としていろいろなものを付け加えることは意味がある」と感じさせました。壁に壁画を描き、「人と鳥と四つ足の動物とはうもの」の像を神殿に造り始めただけでなく、街路に沿って、また、家の中にもこれらの像を造り始めました。

十二宮は、かつて来たるべき救い主であり、神の偉大な救いの計画を表わす天のしるしとしてデザインされていましたが、今や、霊的実体として受け入れられ始めました。乙女座は人々に約束された女のすえを思い出させるしるしであつたものが、実際に、天の女王として受け入れられ始めました。それから、獅子座は、十二宮の他の端に位置する大きなライオンの星座でしたが、天の偉大な霊的王となりました。間もなく、星々、すなわち、物理的「天の軍勢」族に、目に見えない霊的天の軍勢である天使たちの人格が付与されました。

これらの天使なる霊を認めて礼拝することで、人々は非常に信心深く宗教的だと感じるようになったのは確かです。なぜなら、彼らは被造物全体に、どこにでもおられる天の神の内在を認めていたからです。彼らの人生と地上で起こる出来事すべてにかかわりがある特別な天使や星がありました。これらのものを崇めることで、神を礼拝していると彼らは信じていたのです。

さらに、これらの同じ霊的存在とその各々に関係ある星々を通して、神は、彼ら各々の人生における守りと備えと導きを、礼拝の答として提供してくれるはずでした。

しかし、間もなく、この礼拝形式は、非常に複雑になったため、特に、生涯をその研究と解釈にささげる特別に献身した男と女を必要とするようになりました。こうして、献身した人々は、人々の礼拝と犠牲、さらに、彼らの人生を整えるための案内役となりました。こうして、祭司や人々の心が特別に地域に属する霊、または、偉大なる宇宙の霊の地域的あらわれにばかり向けられるようになって、「偉大なる霊の父」（ヘブ一二・九）についての知識を失って行きました。神に対する個人的臨在感が失われるにつれて、神に従う思いも失われて行きました。

しかしまた、この正しい霊的交わりがないために彼らの魂は霊的真空状態になり、何か他の霊との個人的交わりによってでなければ満足できなくなったことでしょう。この霊的真空状態は、間もなく満たされました。実際、天には天の軍勢がありますが、これら天使の中にはサタンの階層的支配の下にある大勢の墮落した天使がいました。神に属する聖なる天使は、バベルでのこのような展開に胆をつぶしたことは確かで、天使たちは人々に仕えるものとして造られたので、人々が天使たちを礼拝することをぞつとするほど忌みきらい、拒絶したはずでした。しかし、このような禁制を、反逆した天使たち、すなわち、悪霊や悪鬼たちは拒否しな

いばかりでなく、悪しき天使たちはそれを喜び、活気づきました。なぜなら、これらすべては、彼らの主人であるルシファーが神となろうとしたその望みと一致していたからです。

洪水前と同じように、これら悪しき霊たちは、悪霊に魅せられ、導かれないと心を開いた人々の精神と肉体を支配し始めました。このような悪霊崇拜に献身した祭司や巫女の精神と肉体に対しては特にそうでした。これら悪霊崇拜の奥義を伝授された人々に、悪魔的啓示が与えられたのです。サタンはある人たち、特にニムロデとその妻セミラミス（ニムロデの妻セミラミスは伝説上の人物）に、神に対する陰謀のすべてを明らかに示したことでしよう。このようなきつかけで、数多くの人類の宗教すべてが現われて来しました。すなわち、進化論に立つ汎神論は、占星術と偶像を崇める多神教の体系を通して広められ、神秘的な心靈術と悪霊の働きによって活気が出て来しました。

一章五〜六節　そのとき主は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。主は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。」

通常、主は人々や民族に、自分たちのしたいことを干渉しないで行なわせます。人は自由であり、自分のしたことに責任があります。人は自分のした悪い行為の結果の報いを受けますが、神は、長い間、忍耐しておられます。それゆえ、なんの障害もなく不敬虔な人々の日常生活が繁栄しているように見えます。

しかし、この世に対する神の目的達成が非常に危険になり、神の介入が必要となった場合が何回かありました。洪水前の墮落はこのような例の一つであり、バベルでの反逆は他のもう一つの例でした。

人々がバベルの塔を建ててから、神が「人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られる」までに、どれくらいの時が経ったか書かれていません。神のご性質から考えて、そこに神を敬う少数の人がいたならば、このような人々が広がり優勢になって、他の人々が悔い改めることを待ち望んで、待てるだけ待たれたことでしょう。しかし、彼らは悔い改めなかったもので、神はついに、「降りて来られ」ました。この「神の擬人的表現」は、常に神が完全に知り得なかったことを意味するのではなく、今、神が公的にまた法的に見たこと、思考したことに基づいて処置しようとしたことを意味しているだけです。それがあまりにもひどい状態になったので、そのままつづくのを放任したら、ノアの時代のように、啓示された神の真理が完全に抹殺される危険がありました。

問題は人々が一つになっていることだと神は判断されました。言語が一つだったので一致は可能でした。神の命令に直接反抗して、ほとんどすべての人が自動的に、人間中心の文明社会を築き上げる決定をしたので、神はもはやこれを無視することはできませんでした。

さらに、ニムロデが持っていると思われるサタンから来る神秘的な知識と悪霊の力で、将来、彼がしようと思っていることで出来ないことはないと思われていました。洪水前の世界の状態は繰り返されるかも知れません。たとえば、神はノアに再び大洪水で全世界を滅ぼさないと約束したとしても、このようなことを許すわけにはいきません。ついでに言えば、ある注解者が、塔を造ったことについて、将来起こる可能性のある洪水からの避難所と解説していますが、このような幼稚な意見は、明らかに間違っています。ニムロデは天

に届く塔を造って、全世界を覆う洪水から逃れることが出来ると想像するほどばかりではなかったでしょう。彼の目的は、もう一度全世界に来る洪水によるさばきの裏をかくためではなく、さばき主である神ご自身を王座からひきずり下ろすことでした。実に、ニムロデはすべての人を一つにしました。多くの人々は、知らずにサタンにくみして従っていたことでしょう。すべての人が彼の陰謀に荷担したあかつきには、確かに他の計画もあったでしょう。もし、サタンの神に対する天的反逆が成功し、神を王座からしりぞけることが出来たなら、サタンはニムロデに全世界、おそらく全宇宙をさえ含めた支配者にすると確約したことでしょう。

——一章七節 「さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにならう。」

ニムロデとその軍隊が陰謀と地上への侵入についての会議をしたように、今度は、神が天で会議を召集し、ニムロデの計画の遂行を妨げるため、どのように行動を開始するかをはかりました。この神の会議は七節で「さあ、われわれは（訳注・新改訳では省かれている）」と複数の代名詞が用いられています。前に、一章二六節と三章二二節でもたれた原初の会議のように、少なくとも、三位の神と聖なる天使たちが、この会議に参加していたことでしょう。

主は、ニムロデの秘密会議でのばかげた決定を嘲笑するかのようになり、「行って」と言われました。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう」（詩二・二）ののでしょうか。もし、彼らが、神の怒りが彼らの頭上に下ることを願うのなら「主は、彼らを嘲笑される」だけでし

う。人々は、「地を満たせ」という神の単純な指示に従って、多くの別々の対等の政治単位に分かれることに不満であったことを示しました。

彼らは、一つの巨大な中央集権的で規格化された政府の下にいつしよにとどまることを望みました。そして、同時に、この一つに統合された集団は、速やかに膨大な統一された反神論へ発展しました。協力して互いに組織化する彼らの能力がその鍵でした。これは複雑な計画を明確に系統だてて実行する彼らの能力に依存していました。これらすべての基盤は、互いに伝達し合う能力にありました。彼らは、みな「一つの発音、同じ語彙」、すなわち、同じことばで話し、同じ考え方をしていたのです。

それゆえ、天における会議は、ことばを混乱させることに決定しました。すなわち、くちびるを通して同じ音を作り出す能力を乱し、たとい彼らの考えが同じであったとしても、互いに話していることが理解できないようにするということでした。

一章八・九節 こうして主は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。主が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、主が人々をそこから地の全面に散らしたからである。

ことばを乱すという手段で、神は人の子ら（文字通りにはアダムの子ら）が町を建てつづけるのを止めざるを得なくさせ、地の全面に散らしたのでした。バベルの町に急速に拡がったこの驚くべき混乱は容易に想像できます。おそらく、同じ家族に属する人々は、互いのことばをなお、理解しあえたことでしょう。しかし、

異なる家族の人にはたわごととられました。人は、他の人から自分がばかにされているように考えたことでしょう。職場の親方は、手下が彼の指示に従わないのでいらだつようになったし、労働者は監督が彼らからかい、彼らをだめなやつだと思っていると想像したことでしょう。宮殿そのものの中では、権力者二ムロデは、しもべたちに彼の命令を実行させることができないことが判明し、これら命令をきかないしもべたちを罰するように指示した時、その指示に従わないので猛烈に怒りました。

一貫性のない大声の議論が町中に爆発し、結局、全くの混乱が町を支配してしまいました。ついに、各々の家族は家族単位で、互いに交わりのない状態で別れるしなくなりました。家族間の協力によって、これ以上都市を造り上げることはできないので、各家族は各々の必要をどのようにして満たすか、各々で学ばなければなりません。すぐにではなかったとしても、結局、各家族が部族になり、バベルから離れて、神が初めに計画されたように、各自の生活様式を達成するしなくなりました。

人口が増加するにつれて、地理的にも急速に人の住む地域が広がって行きました。当時、人はまだ長生きしていたので、各々の家族には子どもの数も多く、人口増加にとつて好都合な環境でした。力の強い、より勤勉で知的な部族は、より好ましい生活条件の地域を手に入れました。資源がどんどん増える結果、間もなく、彼らは大きな民族となりました。弱く、野心もない家族は、大きな文明の中心からますます周辺へと押しやられて、彼らが独自の文化を確立する前に、新しい地方に植民せざるを得なかったのです。

この移住と文化の発展には、進化論者が考えているような長い時間を要しませんでした。むしろ、わずかに数世代で世界中が人の住むところとなりました。最近、考古学の研究でますます確かになってきたことは、文明は地球のあらゆる地域で多かれ少なかれ同時に、しかも、わずかに数千年前に出現したということです。

似たようなタイプの文明の発展は、何回も繰り返したように思われます。ある部族が未開発地域に移住すると、その地域で彼らが住むのに適当な所を見いだしました。最も多くの場合、防衛上高台にある土地で、しかも水や食糧の供給のために泉か川が近くにあって、肥沃な沖積性の原野があり、そこに村落を作ろうとしたことでしょう。部族の人々は確かに、農業、牧畜、製陶、冶金などの役に立つ多くの技術を知っていました。それらをすぐに用いることはできなかったことでしょう。鉱脈を発見し、採掘し、精練しなければなりません。煉瓦や陶器を作るため、適当な粘土が発見されなければなりません。家畜は飼育され、穀物は植えつけられなければなりません。これらすべてに数年かかったことでしょう。その間、部族は、狩猟や漁労をし、また果物や木の実を集めて生きつづけなければならなかったことでしょう。もし、できるなら一時的に雨露をしのぐ家屋を石または木材を用いて建てたり、時には洞窟を用いたりしなければならなりませんでした。

これらその地域における最初の住居跡を、進化論者たちは石器時代文明の跡であると示唆していますが、実際には、これらは一時的な住居形態を反映しているに過ぎないのです。陶器または金属製品の材料が発見されるとすぐ、そこでは、考古学者の言う石器時代は銅器時代、鉄器時代へと移行したのです。「村落の経済構造」は人口が増加し、適当な建築資材が発展するにつれて、速やかに都市化して行きました。

たまたまその土地が特に好ましいときには、より強い部族が次々と侵入し、先住民を追い放ったり滅ぼしたりして、明らかに異なる文化がその所で最初の文化を引き継ぐことになったのです。ある部族は急速に大きくなり強い国家に発展したし、ある部族はゆっくり成長し、ついで、停滞し衰退し、ついには滅び失せたことでしょう。

各家族、各部族が各々一つの単位としてバベルから移住するにつれて、彼らの各々は独特の文化を発展させただけでなく、肉体的、生物学的特徴もはっきり区別できるようになりました。彼らは、同じ家族内でだけことばの伝達ができたので、家族以外の人と結婚する可能性はありませんでした。したがって、少なくとも数世代にわたって、非常に近い親戚から成る新しい家族を作り上げなければならなかったのです。小さな成員から成る血族結婚では、変異が急速に起こることは遺伝学上わかっています。しかし、非常に人口の多い異なる種族間の結婚では、変異は非常にゆっくり現われます。後者では、優性の遺伝子だけがその成員の肉体的特徴として外に現われるのが普通です。それは多かれ少なかれ平均的特徴を反映しており、非常に独特な特徴を持った遺伝的因子でさえ、その集団のジーンプールに隠されてしまいます。

しかし、その成員にある特別な遺伝子の組み合わせが、大集団では劣性であるとしても、小さな集団の場合、顕現し優性になる機会があることでしょう。こうして、近親間における交配では、わずかな世代で皮膚の色、背丈、毛髪の性質、容貌、態度、環境に対する適応、その他の明らかな特徴が、特別な部族や民族に関連するようになるのです。

洪水前、地球の人口が比較的少なく、遺伝子に突然変異を起こす自然放射能も少なかったため、近親間の結婚が遺伝学上の障害をもたらすような危険性はまだありませんでした。しかし、さらに多くの年代を経て、突然変異の蓄積と突然変異に伴う先天的欠陥をもたらす危険性が増し加わり、ついに神が近親結婚は不法であると宣言されるほど重大な問題になったのです（レビ一八・六―一四）。

バベルの事件の後に起こったこれらの出来事について、聖書が正確に記していないのは事実ですが、前述の事柄は聖書の記述にも、科学上のあらゆる真の資料にも合うように思われます。全世界的な民族の移動と

発展、さらに互いに違う各民族の肉体的特徴は、神が直接異なる言語を課した直接の結果だということに留意する解説は、人類にとって言語の重要性に関する一つの明白な説明です。

もちろん、時間の経過につれて、人々は努力すれば互いの言語を学べるようになりました。言語の混乱は、ただ単に音声学にだけ当てはまり、根底に横たわる人間に特異的な思考過程についてではありません。地方ごとに、国々（創一〇・三一）ごとに人類の言語が分かれているとはいえ、なお、人類は一つの種でした。結局、このことは異民族間の結婚や混血をある程度許すでしょうが、異なる国家の設立は不変のものとなりました。神がことばを乱されたという神のわざは、それが奇跡であったという事実だけで、その他のことはわかりません。実際、言語というものが奇跡ですが、動物の唸り声、吠え声が、自然に音節的区切りの明確な象徴的で抽象的な人のことばになり得るような方法は決してないのです。

創造の驚くべき奇跡の一つは、人々にこの能力を授けなければならなかった点にあります。同様に、創造のもう一つの奇跡は、瞬時にして言語にこれらの新しい音韻構造を造り出したことです。おそらく、バベルの反逆に加わらなかった人々の脳と神経と舌との複雑な複合体はそのままに残されていたことでしょう。

しかし、たとい神が人類を異なった民族単位に分割し、全地に広げようとされたとしても、言語の多様性は人に対する神の本来の目的ではなかったはずで、それ故に神はすべての国民が、将来のある日神のことばに服従し、神の意志に従う時が来ることを約束しておられます。「そのとき、わたしは、国々の民（文字通りにはその人々、すなわち、すべての民族）のくちびるを変えてきよくする。彼らはみな主の御名によって祈り、一つになって主に仕える」（ゼパ三・九）。それでも、なお異なる国々があることでしょう（ゼカ一四・九、一六～一九、イザ二・二、ミカ四・二、詩七二・一七、黙二一・二四～二六を参照）。ことばの障壁を、将来、奇跡

的に取り除く前兆とでもいふべきひらめきは、ペンテコステの日に聖霊の降臨によって起こりました。この時、最初の弟子たちに神の不思議な賜物である異言が与えられ、彼らが神のすばらしいわざを多くの国のことばで宣言することを可能にしました（使二・六～一一）。

家族単位で荷造りし、バベルから離れて行った時、その場所の最後の記憶は、かつてバベルでの友であり、そこでいっしょに生活していた人々の口について出て来る、怒りとわけのわからない大声、すなわちバベルでした。

「それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。主が全地のことばをそこで混乱させたから、……」「混乱」ということばは、ヘブル語でバラルです。バラルは「混ざる、または混ぜる」を意味し、こういうわけで、さらに「混乱」という意味になりました。この特別な文脈の意味は七節で、「……彼らが互いにことばが通じないようにしよう」と、その目的をはっきりさせています。九節を初めて書いたセムあるいはモーセの心では、「バベル」という名は、この「バラル」ということばと結びつけられていたと思われる。こうして、その名は、「混乱」を意味しました。バベルで混乱に陥った群衆から発したことばそのものが、ちょうど、理解できない族赤子の片言のように、そこを去ったこれらの人々の心に焼きつき、その都市の名になったと思われます。英語の「バブル」（bubble、わけのわからぬ小児の片言）という擬音語のような例はそう多くはありません。擬音語とは、実際の音をまねて作られたので、基本的には全世界のどこでも理解できることばです。こうして、その後が続く年月、まさにバビロンという名は全地の人々にとって、「バブルの町、すなわち、混乱の町」を意味するようになったのでしょう。

後になって、バベルを記憶にとどめている人々は、「Babel（神の門）」で、バベルということばの意味を高

めようとした。しかし、バベルの真の性質は、一章の最初の記録、またはその名の発音からも明らかです。バビロンは常に、宗教的事例でも言語の上でも混乱の源であり、中心でした。そこに打ち立てられた複雑な宗教制度は、そこから散らされた全民族に持ち込まれたようです。多くの家庭には、少なくとも徹底的に教育された一人の人がいたようです。おそらく、ニムロデは祭司または女祭司となる人を家族の中から一人ずつ出すように、各家庭に要請したことでしょう。そして、これらの人々が自然に、各々の部族の霊的指導者になっていったことでしょう。こうして、占星術や本質的には進化論である多神教的汎神論が、古代世界のすべての民族の宗教制度となったのです。天の神々や女神たちを並べたバビロンのパンテオンは、アッシリア、エジプト、ギリシア、インド、その他の国にあるパンテオンと等価のものでした。すべてのパンテオンには、占星術に用いる十二宮の紋章があり、それらを造った人々は偶像崇拝者でした。さらに、これらの宗教はどれも、一方向か、または、その偶像と関連のある悪霊との相互交流の体系でした。

真の神についての思いは、時間の経過につれて彼らの意識から薄れて行きましたが、すべての民族は、彼らが全地に散らされた後も、天におられる真の神の認識をある程度とどめていました。また、彼らは、洪水前と離散した時の墮落した習慣をある程度とどめていました。神の約束された贖い主についてのぼんやりとした記憶は、いろいろな動物または人をいけにえにする制度で、歪められてしまいました。これらの犠牲を通して彼らの日々の生活を支配していると思われる霊的存在の好意を得ようとしたのです。結局、これらの霊どもは閉鎖系宇宙における、自然界のもろもろの力と同一のものであると、単純に認められるようになってきました。

テラの系図

バベルでの離散後、系図のどこかに欠けた所があるかどうかによりますが、ほぼ二百年またはそれ以上にわたって、人類の歴史に関する情報は何も啓示されていません。すでに述べたように、諸民族は移住し、彼らの文化は進み、真の神に関する知識が人の意識からますます後退して行きました。北方では氷の層が大陸を覆いながら南下して来ました。今はサハラ、アラビアなどの砂漠になっている南の地方は雨の時代で、豊富な水源を持ち、全世界に広がって発展している文明を支えることができました。

世界史上これらの出来事は非常に重要でしたが、聖書は沈黙してこれらをとばしています。なぜなら、啓示の歴史において何も重大なことは起こらなかったからです。人はすべて神に逆らったので、神はもう人類と直接、または人類を通して間接的に働かれようとはされませんでした。神のことばを受け取り、他の民族に伝える特殊な民族を準備するのに、神が着手するちようどよい時はまだ来ていませんでした。まず、諸民族を世界に造り上げ、それから適当な人を選び、特別に選ばれた民をスタートさせるために訓練しなければなりませんでした。

それにもかかわらず、約束された「すえ」の家系は保たれていました。族長たちの記録は保護され、神の計画は予定通りに進行していました。アブラハム以前の聖書の記録に、洪水からアブラハムの召命に至るまでの族長の系図と年代史が保存されていました。ここは、一見、あまり重要に思われませんが、実際は、

聖書の中で、非常に重要な箇所です。

一章一〇、一一節 これはセムの歴史である。セムは百歳のとき、すなわち大洪水の二年後にアルパクシャデを生んだ。セムはアルパクシャデを生んで後、五百年生き、息子、娘たちを生んだ。

ここで、「セムの系図」は終わりました。セムは、一〇章一節から十一章九節に、洪水後三代までのハムとヤペテの子孫と、自分に関しては六代に至るまでの子孫の系図を記録し保持していたと思われます。セムの記録には、洪水後四代目でペレグの誕生の少し前に起こったと思われることばの乱れと離散の記事が載っていました。

この系図の記録に欠けた世代がないならば、洪水後九代目に当たるテラによってこの記録は、取り上げられました。また欠けた所がないとして、この章にある年数は、セムがテラの死後まで生きていたことを示しています。したがって、テラはセムと話し合う機会が十分にあり、セムから記録を受け取ることができました。ノアでさえ、テラが一二八歳のときまで生きていたのです。

例えば、以下の検討でわかるように、系図に欠けた世代があったとしたら、ペレグの時代と思われますが、それでも、テラの時代はある程度セムの時代と重なり合っていたと思われる。もし欠けた世代がなかったとしたら、セムはテラの誕生後二七八年生きていたことになり、もし二百年以上の欠けがあったとしても、同時代に生きていたことが可能です。

すでに記したように、離散後のある時、一〇章二六、二七節に名が挙げられ、その歴史が示唆されている

ように、セムは南方に移ってアラビアに入り、ヨクタンの息子たちの中で生活した可能性があります。その場合、ヨクタンの兄弟ベレグの子孫との直接的交わりを失ったことでしょう。おそらく、その時点で、セムは、約束の子孫の到来はヨクタンを通してだと考えたことでしょう。もしそうだったとすると、セムは間違っていたのです。なぜなら、次の一組の系図を保持するように定められていたのはペレグの子孫のテラであり、彼が約束の家系にあったことが判明したからです。多くの年代が経って、セムはどういうわけか若いテラと交わりを持つに至り、この人こそアダムからノアに至る聖なる記録を、セムの兄弟たちや彼自身の記録と共に預けるべき人であると実際に悟ったと思われます。

それゆえ、テラは一章一〇節から二七節前半までの短いけれども重要な記録を保持していたと思われる。もっと正しく言うならば、聖霊がこの期間の記録として価値ありと判断した、ただ一つの記録は、明らかにテラに至る家族の系図でした。

テラは自分の家系の先祖としてセムの名を用いて、セムの記録にさかのぼって、自分の記録を結びつけました。セムは百歳の時、すなわち洪水の二年後にアルパクシャデを生みました。洪水が始まったときセムは九十七歳で、一年後の洪水が終わった時は九十八歳だったのは明らかです。おそらく、アルパクシャデの二人の兄弟エラムとアシュルは、大洪水直後の二年以内に生まれたことでしょう（彼らの名が一〇章二二節でアルパクシャデの前に挙げられている）。しかし、この目的は、いろいろな家族のすべての名を挙げるのではなく、ただ、セムからテラへの直系の家系を挙げることです。

セムは、アルパクシャデの誕生後五百年も生き、一〇章二二節に挙げられている他の息子や、記されていない娘たちをもうけました。各々の族長たちは、たとえ名は挙げられていないとしても、おそらく息子たち

と同時に多くの娘たちを持つていたことでしょう。

一章二一～一七節 アルパクシャデは三十五年生きて、シェラフを生んだ。アルパクシャデはシェラフを生んで後、四百三年生き、息子、娘たちを生んだ。シェラフは三十年生きて、エベルを生んだ。シェラフはエベルを生んで後、四百三年生き、息子、娘たちを生んだ。エベルは三十四年生きて、ペレグを生んだ。エベルはペレグを生んで後、四百三十年生き、息子、娘たちを生んだ。

この節はアルパクシャデからペレグに至る系図で、「彼の時代に地が分けられた」(一〇・二五)のです。一方、一八節から二五節はペレグからテラに至る系図です。典型的な決まり文句としては族長の全年齢と、結局は死んだ事実に関する記述がある以外には、この箇所は全体的に、五章六節～二七節までの記事とほぼ同じです。一章は、同じ情報が述べられている息子の誕生前と誕生後の族長の生きた年齢を加えて寿命を出すことができます。

五章と一章を比較してみると、洪水直後から族長の寿命が短くなり始めていることが明らかにわかります。ノアは洪水前の先祖とほぼ同じ九五〇歳まで生きました。しかし、セムの生涯はわずか六百年でした。アルパクシャデは四三八年、シェラフは四三三年、エベルは四六四年でした。後に記すように、ペレグ以降はさらに急速な年齢の短縮が起きました。

この寿命の短縮の引き金は、明らかに洪水によってもたらされたに違いないと思われます。「放射線を吸収する水蒸気の天蓋が消失し、それに続いて、遺伝子と体細胞の突然変異が著しく増加したに違いありません。

しかし、遺伝子系に起こった突然変異の影響が、親ゆずりの長寿に重大な影響をもたらすまで何世代もかかったのは確かです。しかし、体細胞に起こった突然変異の増加は、すぐに老化の過程を早めたに違いありません(訳注・体細胞にある若返り細胞である分裂期にある幹細胞は、紫外線の照射によって破壊され、若返りができなくなる)。この他に、もっと厳しい環境と食料として不適当な栄養、近親結婚、生活上のストレスなど種々の要因を含んでいたかも知れません。

ルカの福音書三章三六節の系図に、アルパクシャデとシェラフの間にカインンの名が挿入されていることに注目しなければなりません。この名は七十人訳聖書のある原本に見いだされます。そして、ルカは彼の記録の編集に当たって七十人訳聖書を用いたのかも知れません。もし、カインンという名がこの系図に含められるべきであるなら、他の世代が前述の論説の適当なところに挿入されるべきでしょう。

しかしながら、歴代誌第一、一章一八節の系図に、この名は記されていませんし、創世記一〇章二四節にアルパクシャデの息子としてカインンの名は挙げられていません。現在のヘブル語の聖書を編集したマソラ編纂者は、疑いもなく七十人訳聖書をよく知っていました。しかし、それにもかかわらず、マソラ写本にはカインンの名はありません。そこになかったカインンの名がどうして七十人訳聖書に加えられたのか、またマソラの写本から抜き出された他の本文で、創世記と歴代誌第一の両方で不注意にもカインンの名が抜けてしまったのはなぜかは未解決の問題です。ユダヤの写本家は筆写の正確さを保つのに細心の注意をはらったことはよく知られているのでこの点から彼らがなぜこんなにも明らかな誤りを犯したのか理解に苦しみます。さらに、カインンの名はサマリヤ写本やヴルガータ聖書のように古代に編集された旧約聖書のどれにも見いだされません。

他方、なぜ、七十人訳聖書の訳者が独断的にその記録にカイナンの名をつけ加えたのでしょうか。ケナンという同じ名がエノスの息子として創世記五章九節に見いだされることによるのかも知れません。創世記五章に見られる名はすべて創世記二一章に出て来る名とは異なります。それで、筆写者がルカの福音書三章三六節を写していた時に、不注意にも三章三七節からカイナンを写し取ってしまったのかも知れません。こういうわけで、その系図にカイナンの名が二度書き込まれていると取ることもできます。新約聖書の筆写者は旧約聖書の筆写者より、写本に当たってしばしば慎重さに欠けていたことは知られています。

最も古い七十人訳聖書の写本の創世記二一章のリストに、カイナンの名は載っていません。したがって、ヘブル語本文を筆写した人ほど細かい所に気を配らなかったもので、七十人訳聖書を後で筆写した人が、当時、彼らが持っていたルカの福音書のある写本を基にして、彼らの写本にカイナンの名を挿入した可能性もあるのです。これが、この特別な問題を最もよく研究した学者たちの結論です。

この問題は解決されていませんが、主な証拠はヘブル語本文をそのまま受け入れるべきことを示しているように思われます。カイナンの名は載せるべきではなかったのです。ルカの福音書三章三六節への挿入は、多分、筆写者の誤りでしょう。これらの節にある数字を加えると、ペレグは洪水後一〇一年で生まれたことになります。これはおそらく、バベルの離散の年だったでしょう。ある人は、百年だけでは洪水を生き残った八人から、バベルの町と塔を建てることのできるほどの人口になるのに十分な時間がなかったと思うかも知れません。しかし、最初の百年間、人口がものすごい勢いで増加したのは確かです。各家族ができるだけ多くの子どもをもとうと努力したことは、神の命令に従うことであると共に、すべての人にとって役立ちました。

セム、ハム、ヤペテの息子たちの名は十六名挙げられています。もちろん、記述されていない息子たちもいたことでしょうし、ノアでさえ、洪水後、記録にない子どもを得た可能性があります。その上、少なくとも多くの娘たちがいたと思われます。こうして、洪水後の第一世代（訳注・一世代は三十年と考える）は三十二名で、これは最初の六人の親からの人口増加率は五三三パーセントです。この増加率がそのままであったと仮定すると（この仮定は控え目ですが）、第二世代は一七一人となり、第三世代は九一二二人となり、バベルの離散の時に成人だけで少なくとも一二〇人いたことになります。第四世代の多くの若者もまた労働し、塔を建てる手伝いを十分できる年になっていたことでしょう。さらに、各家族には、前述の計算値より多くの子どもたちがいた可能性があります。一年の増加率がわずか八パーセントでも、百年以内に九千人の人口になります。

すでに記したように、諸民族の表にある名は完全な名簿ではなく、ノアの三人の息子たちから出て来た家族の中から特に選ばれた者の名簿に過ぎないのです。こういうわけで、大洪水後わずか百年で離散を迎えた時、地上の人口が数千人という可能性があることは容易にわかります。しかし、たとえば数百人に過ぎなかったとしても、数年かかって塔を建てることは出来たはずで、ピラミット、ストーンヘンジ、メソポタミアのジグザット（バベルの塔の原型の複製と思われる）や、その他古代の多くの巨大な建造物は、古代の人々がすばらしい工学技術と工事能力を持っていたことを示しています。それゆえ、洪水から離散に至るまでの文字通り完全な系図と年代史として、現に持ち合わせているセムからペレグに至る記録は採用すべきでないとする適切な理由はないようです。

一章一八〜二五節 ペレグは三十年生きて、レウを生んだ。ペレグはレウを生んで後、二百九年民諸生き、息子、娘たちを生んだ。レウは三十二年生きて、セルグを生んだ。レウはセルグを生んで後、二百七年生き、息子、娘たちを生んだ。セルグは三十年生きて、ナホルを生んだ。セルグはナホルを生んで後、二百年生き、息子、娘たちを生んだ。ナホルは二十九年生きて、テラを生んだ。ナホルはテラを生んで後、百十九年生き、息子、娘たちを生んだ。

もし、バベルの塔を建てるために十分な人口に達することに關して大きな問題がないとするなら、アブラハムの時代に世界の人口がかなりの数に達していたことは容易に理解できます。創世記二二章四節によると、アブラハムが七十五歳の時は洪水後三六七年で、離散後二六七年に当たります。

ノアの孫たちの記録が完全であったとすると、洪水後の第一世代の人口増加率は、ほぼ五三・三パーセントであったことは先に述べた通りです。もし、一世代を三十三年とすると、ノアの洪水後の百年間に三代であったことになり、アブラハムがカナンの地へ行った時までには十一世代であったことになります。セムからの系図を見ると、アブラハムはセムから九代目です。しかし、アブラハムの年齢が七十五歳ということとは、たとい、当時彼に子が無かったとしても、その間に通常の二世代分の日時が経過したことになります。結局、アブラハムがカナンの地へ行った時、洪水後十一世代だったと考えるのは理にかなっています。

もし、これら各世代の増加率が第一世代よりいくらか低く、五〇〇パーセントであったとするなら（この増加率は初期の増加率として不可能な理解出来ないものではない）、アブラハム当時の人口は少なくとも三億人に達していたはずですが！ この人口増加率は、時間の経過につれて減少したのは当然です。しかし、少

くともアブラハムの時代の世界人口は、当時世界中にあったあらゆる文明の証拠を説明できるほど十分多かったことは明らかです。

それゆえ、アブラハムの時代に人が地に満ち、文明が全世界にゆきわたっていたことを説明するために、これらの年代表に書き落としたと仮定する必要はありません。しかし、他方、少なくともほんの少しの書き落としがあったという可能性を認めなくてはなりません。「Begar（父が子をもうける）」ということばは、もちろん例外的用法ですが、時には、すぐの息子ではなく子孫を指すのに用いられることがあります（『創世記の記録』十一章にあるこの可能性についての検討を見よ）。

この章の系図に欠けがあるか否か、最も論議的となるのはペレグとの関係です。ペレグ後の族長の寿命は、ペレグ以前の族長の寿命のほぼ半分です（ペレグ以前の三人の族長の寿命は、四三八歳、四三三歳と四六四歳で、ペレグの時になって突然二三九歳となり、ペレグの後の二人は二三九歳と二三〇歳でした）。この突発的な寿命の明らかな低下は、よくわからないのですが、ある期間の書き落としがその間にあった可能性があり、この未知の期間に寿命は徐々に低下していったことを示唆しています。

しかしながら、このような示唆にも難点があります。もし系図と系図のつながりが細工されておらず完全なら、系図の連なりにある各々の年代資料をこなにも注意深く記した理由がないように思われます。著者が彼が書いた記録のどこかに欠けがあるとの意識をもっていたことを示すものはありません。さらに、歴代誌第一、一章二五節とルカの福音書三章三五節、またはこの年代に關する他のどの箇所でも、欠けた箇所があることを暗示している所はありません。寿命の突然の低下を除いて、年代史上の欠けを示す証拠は何もありません。

すでに吟味したように、寿命の低下は、明らかに離散が起こったペレグの誕生の直前でした。この経験は全人類にとつても大変な打撃で、人類の肉体面にも重大な影響を与えたことは驚くには当たりません。小さな部族社会での新しい生活条件下で生きるだけでも困難なのに、洪水後数世代にわたり蓄積してきた遺伝子に起こった突然変異の悪影響が近親結婚の必要性のゆえに大いに増し加わりました。

だいたいにおいて、この時に寿命の低下を来たした説明のために、系図に書き落としを想定する必要は全くないように思われます。

それゆえ、ここで年代を引き延ばそうと試みるただ一つの理由は、創世記五章と十一章の系図の年代が完全であるという仮定に基づいて作成されたアッシャーの年代よりも、初期の文明はもっと以前に年代付けされるべきであるという考古学者の意見に合わせるためなのです。しかし、この意見は、主として斉一説に立つた年代決定法、特に、放射性炭素年代測定法に基づいているのです。近代科学の学説に基づいて聖書を解釈すべきではありません。また、エジプト、シュメール、その他実際に起こったことが明らかな古代国家の書かれた歴史資料に照らしてみるとき、これらの年代の間に書き落とした世代が何かあったとして挿入する必要がないことがわかります。放射性炭素年代測定法やその他の年代決定法に関する斉一論者の前提は、近年、大いに疑問視されています。そして、洪水の時期が、伝統的なアッシャーの年代である紀元前三五〇年よりはるかに早い時期としなければならない確固たる証拠はないのです。

以上の問題は、未解決かも知れません。そして、十一章には一つかそれ以上の欠けた世代がある可能性は残っていますが、人類の起源に関する進化的年代に合わせるために、この年代史を延長しなければならない正当な理由はどこにもありません。進化論では、人類の起源を少なくとも百万年とします。洪水からテラの誕

生までの二二二二年をどんなに引き延ばしても、百万年も前にさかのぼらせることはできません。セムからテラに至る系図で、世代を挿入できる可能性のある所は八箇所を過ぎません。八箇所を引き延ばして百万年にするためには、各世代間に平均十二万五千年を挿入する必要があります。もちろん、これはばかげたことで、検討する値打ちもありません。ペレグからテラまでの族長たちの実際の名は、創世記一〇章には書かれていないで、この所で初めて出てきます。ペレグ、レウ、セルグ、ナホル、テラの順に名が挙げられています。各氏鰯各の族長たちには他に息子、娘たちがいたと思われませんが、彼らの名は挙げられていません。

一章二六、二八節 テラは七十年生きて、アブラムとナホルとハランを生んだ。これはテラの歴史である。テラはアブラム、ナホル、ハランを生み、ハランは口トを生んだ。ハランはその父テラの存命中、彼の生まれ故郷であるカルデヤ人のウルで死んだ。

五章と十一章の系図の最後が、ともに三人の息子の名を記した族長の名で終わっているのは大変興味深いことです。五章はノアの息子、セム、ハム、ヤペテで、十一章はテラの息子アブラム、ナホル、ハランです。また両系図とも父の年齢は、三人の子どものうち最初の子が生まれた時の年齢から推定できます。ノアの場合は五百歳、テラの場合は七十歳でした。テラの場合は意識的に先祖ノアの形式にならった書き方をしたかのように思われます。おそらく啓示によったと思われませんが、テラは新しい神のみこころが自分の息子たちを通して始まることを知っていたことでしょう。それはちょうど、ノアの息子たちと同じです。

とにかく、よくわかりませんが、テラはセムから受け取った族長の記録を保存するために自分が選ばれた

ことを知っていました。そして、テラは二七節に「これはテラの歴史である」として、彼に与えられた課題を完了しました。

次の著者は、おそらくイサク（二五・一九）で、一章二七節後半の物語を取り上げ、自分の記録をテラの記事に結びつけ、テラの三人の子の名を挙げています。一章二六節、二三節、二二章五節から見て、テラはイサクが三十五歳になるまで生きていたようです。アブラムがテラの一番上の子で、テラが七十歳のときに生まれたと推定されます。テラは何とかして彼の記録を直接イサクに伝えたと考えられます。しかし、一二章四節から見て、父をカランに残したとき、アブラムはこれらの資料をすべて持ち去ったというのが、最も事実に近いことでしょう。特に、ヨシユア記二四章二、三節にあるように、テラは晩年に偶像礼拝者になったと思われることから、そう考えられます。

アブラムだけでなく、テラはナホルとハランの父で、彼らの名はともに創世記二四章一〇節と二八章一〇節にあるメソポタミアの町の名と関係があります。ナホルは祖父にちなんで名づけられました（創一一・二四）。兄弟ハランは二三五歳になる前に死にしましたが（創一一・二六、二八、三三）、父テラはまだ生きており、その間にハランはウルに帰り、父を訪問したと思われます。ハランは息子ロトを残して死にしましたが、ロトは間もなく叔父アブラムと共に出発しました。

一章二九〜三〇節 アブラムとナホルは妻をめとった。アブラムの妻の名はサライであった。ナホルの妻の名はミルカといって、ハランの娘であった。ハランはミルカの父で、またイスカの父であった。サライは不妊の女で、子どもがなかった。

ロトの母の名は挙げられていませんが、アブラムとナホルの妻が、ここで紹介されています。なぜなら、後で起こるできごとと深いかわりがあり、ハランは彼の二人の兄弟が結婚する前に死んだからです。

事実、ナホルはハランの娘で彼の姪に当たるミルカと結婚しました。ハランが死んだとき、アブラムがロトの保護者になったと同じように、ナホルがミルカの保護者になったのかも知れません。ナホルはミルカが成長し、一人前の女になったときに妻にめとりました。

ハランには他にも娘があり、イスカと言いましたが、彼女についてはこれ以上何も記されていません。ユダヤの伝承では彼女はサライで、アブラムの妻であったとしますが、どうもそうではなかったようです。二〇章一一節でわかるように、サライはアブラムの妹であって姪ではありませんでした。また、サライは明らかにテラの娘でしたが、テラには妻が一人以上あったので、サライはアブラムの異母妹であったのです。このような近親結婚は、後にモーセの律法で禁じられましたが、私たちが検討してきたように、このような近親結婚はよくありました。当時は実際に、族長の家族の霊的純粋さを保つために、遺伝学的純潔さをある程度犠牲にする必要があったようです。こうして、できるだけ信仰の家に偶像を持ち込むのを防衛したことでしょう。記録には、このときサライは不妊の女であったとあります。ハランやナホル（創二二・二〇〜二四）とは異なっており、アブラムにはウルでもメソポタミアでも子は生まれませんでした。約束の子は約束の地で生まれなければならなかったのです。

一章三一〜三三節 テラはその子アブラムと、ハランの子である孫ロトと、子アブラムの妻である嫁サライとを連れて、カナン之地へ行こうとカルデヤのウルを出たが、ハランに着いてそこに住んだ。テラの年は二百五歳であつた。テラはハランで死んだ。(協会訳)

テラがカルデヤのウルを去る決心をしたのは、明らかに、ハランが死に、アブラムが結婚して間もなくであつたようです。考古学者の発掘は、ウルが大きな都であつたことを示しています。アブラム以前の時代に大きな図書館があり、高度に文明化された都市でしたが、偶像に満ちた邪悪な都市でもありました。

この節は、テラ自身がカナンの地に行くように主から何らかの命令を受けていた可能性を暗示しています。もしそうなら、彼は部分的に従っただけです。彼はすぐにウルを立ちました。しかし、砂漠を西に横ぎって直接カナンに行く代わりに、北西のメソポタミア峡谷に行き、結局、ハランの町に到着しました。

ハランの町はテラの息子ハランが建てたか、そうでなければ、少なくとも息子ハランの名を付けた居住地であつたようです。ウルはペルシア湾に面したユーフラテス川の河口にありました。三角洲が下流に形成される千年くらい前で、ウルはもとも大きな港町でした。おそらく、ハランはウルから約千キロ北西に、一方、カナンは約千キロ西にありました。

テラは、自分をウルに訪問してきていた息子のハランが若死にしたので、その事後処理のためにハランの町に行く必要があります。こうして、カナンへの途上、ハランに立ち寄るのがよいとなつたのかも知れません。ユーフラテス川流域を旅して行くに当たって、一行は大都市バビロンや、その他のカルデヤにある多くの大都市を通過するか、またはその近くを通らなければならなかつたはずで、彼らは、二百年前にバビロンで起こつ

た人類に対する恐ろしい天罰を確かに思い出したはずで、

他方、彼らは通過する国々のすばらしい繁栄に、おそらく、強烈な印象を受けたことでしょう。ハランの町はカナンやシリヤからの貿易路として重要な位置を占めていました。そして、またたく間に重要な都市になりました(事実、ハランの町は今日もあります)。以上の考察に合わせて、テラの老齢がカナンの地に行くのをあきらめさせたことでしょう。テラは最初の息子が七十歳で生まれ、その後生まれた息子も加えて三人とも成人しており、しかも、ハランが三人の子どもをもっていたのですから、このころ、テラはおそらく百歳は越えていたことでしょう。結局、彼はハランの町に最後まで住みつき、二〇五歳で死にました。

彼らがウルを去ったとき、テラは孫のロトと共にアブラムとサライを連れていました。ナホルはウルに残りました。そして、後でナホルの妻となつたロトの妹ミルカ、さらに他の妹イスカも一緒にウルに残つたことでしょう。しかし、後に、ナホルは自分の家族をハランの町、または、二二章二〇節から二四節、二四章一〇節、一五節、二七章四三節、二八章二節、二九章四節にあるようにナホルの住む町の近くに連れて行つたはずで、こうして、一族はしばらく一緒にいたことでしょう。

三三節との調和の問題があります。三三節ではテラは二〇五歳でハランで死んだと述べ、一二章四節ではアブラムが七十五歳のときハランの町を去つたと書かれています。また、使徒の働き七章四節でステパノは、アブラムはハランの町を去るのに父が死ぬまで待つたと言っています。一章二六節に、テラは「七十年生きて、アブラムとナホルとハランを生んだ」とあります。もしアブラムが、この節が示唆するようにテラの最初の息子であつたら、テラはアブラムがハランを去った時、一四五歳に過ぎなかつたことになり、テラはそこでさらに六十年生活して死んだことになります。

アブラムが第一子でなかった可能性もあります。ただ、後で重要になったため彼の名が最初に挙げられているのかも知れません。この場合、アブラムはテラがが一三〇歳になった後に生まれ、その後（三十年またはそれより後）に、ウルから移住したとすると、テラはアブラムが七十五歳の誕生日を迎える前にハランで死んだことになります。

テラが一三〇歳になってからアブラムが生まれたというような提案をして、問題を解決することは、アブラムが百歳で子をもうけたことがどうして特別な奇跡とみなされな、ければならないのかという問題を生じさせます。

他の可能性は、ステパノが演説の中で誤った説明をしたとします。この場合、靈感の教義はステパノの演説に対してではなく、ルカがステパノの演説を正確に記録したかどうかに適応されるはずです。しかし、聖書をよく学んでいて、しかも、モーセの律法に親しんでいたステパノがこのような明らかな誤りをするでしょうか。

最も妥当な問題解決の方法は、テラの生涯は神のみこころに関する限り、死んだも同然になったとステパノが考えたことです。また、アブラムはカナンに向かつての旅を自分の家族だけでなく、テラと共にしようと決心した事実からも推論できるように、ステパノはアブラムが神の召命を受けたのは、アブラムがまだメソポタミアにいたときであったと記しています（使七・二、三）。

おそらく、神は、ウルでテラとアブラムに現われ、父と息子は共につれだってカナンに出かけたことでしょう。しかし、テラはハランに長くどまり、結局、カナンに行く意思がないことがアブラムに明らかになりました。ハランでの繁栄と安楽はテラにとってあまりにも大きな誘惑でした。結局、カルデヤの偶像崇拜に

引きずられ始めました。カルデヤの偶像崇拜は、その他の貿易と文化と切っても切れない関係にありました（ヨシ二四・二、一四、一五）。

この点で、現実的に神のご意思と計画に対してテラの生涯は死んだものとなりました。それゆえ、神は彼の召命を新たにされました。しかし、今回はアブラム一人に対してだけでした。主イエス・キリストが、彼に従うように招かれた人にいつかお会いになるというのは、このような状態を指すことでしょう。しかしながら、弟子たちは「主よ。まず行って、私の父を葬ることを許してください」と言いました。ところが、主イエスは「わたしについて来なさい。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい」（マタ八・二一、二二）と答えられました。実際、葬儀の準備が整うまで六十年はありませんでしたがテラは死にました。この記録は立派な、かつては神のように敬われた族長の終わりに際しては、残念な説明です。テラは聖書の一部を記録するために用いられさえたのでした。これは、後世にキリストに従いつづけるのを妨げる、容易で安楽な生活を同じように選ばうとする人々に対する厳粛な警告でもあります。

テラは、「目的のために捨てられた者」（一コリ九・二七）で、おそらく、救われてはいますが、もはや、神にとっては役に立たないようなものになりました。神を信じ、神の祝福にとどまることを願いながら、世とその偶像を持ちつづけようとしたのです。

しかし、神はアブラムに向かつて、「父の家を出て……行きなさい」（創十二・一）と言われました。父テラのこと、新しい民族を開始する神の目的をこれ以上遅らせてはいけなかつ

たのです。テラがどうであろうと、テラの息子は全地の家庭を祝福する器となりました。

後書き

創世記の注解に関しては、日本人が執筆したものや、翻訳書がたくさんあります。そうした中で地質学者ヘンリー・M・モリス著『創世記の記録』(The Genesis Record)の一章から十章までの翻訳出版を決意したのはそれなりの理由がありました。

この書は二部から成っています。第一部は創世記の総説とでも言うべきもので、第二部は創世記一章から十一章までの講解です。創世記一章から十一章までは難解なところが多かったのですが、今や科学資料に照らしての解明が可能になってきました。ほとんどの注解書は

進化論的な考えから脱却できず、何らかの形で進化論を取り入れています。ところが、現代は、進化論は科学でなく、進化論には証拠が何一つないことを、一般の科学に関する書物でも堂々と載せている時代です。それにもかかわらず、神学者が書いた多くの注解書には、進化論によらない解説を見ることができません。たとえば、有名なフランシス・シエーファアの書いた『創世記』などもその例にもれません。

ところが、この『創世記の記録』は純粹に科学資料に立つて聖書の記録を取り扱っています。そして、もののみごとに聖書記録が科学と矛盾しないことを示しています。このような注解書は日本にはなくまったく独特なものと言えます。

創世記一章一節は、他の多くの注解書と異なって、科学的側面から見て実に筋が通っています。七節の水と下の水に関する記事は、実験結果に基づいての考察と巨大生物の化石の問題に説明を与えています。また創世記二章七節の人の創造、二章二一節から二四節までのエバの創造など、まさに分子生物学と遺伝子工学の細かい理解が基礎になっています。正しい科学知識に基づかなければこのような解説は困難です。

創世記三章には罪の起源と、四章には罪の結果としての最初の殺人事件と殉教の問題が記されています。さらに、最初の文明開花は恐怖と困難の中から生じてきたことを示唆しています。四章のカインとアベルはすでに一家を成していて、家長として生計を営んでいたに違いありません。

このような状況の中で、道徳が崩壊し、殺人が日常茶飯事となり、どうしても神の救いが

必要であることを覚えさせられたアダムは、神に祈り求めてセツが与えられました。

五章は、世代を表わすのではなく、アダムからノアに至るまで代々あとつぎとして認められた十名の人と、その人々が世継ぎをもうけた年齢と死亡した年齢を記しています。この記事を通して、神とともに歩んだエノクは死を見ずに移されたこと、すなわち、洪水前も現代も、神とともに歩むことの必要性に変わりのないことが教えられています。さらにこの章では、洪水前の期間と当時の人の寿命がわかります。この五章の記録は特に大切です。これも現代の科学の進歩によつて理解できるようになったもので、この系図の重要性はいくら主張しても言い過ぎにはならないでしょう。

三章から五章までは、一六五六年にわたる洪水前の失われた世界に関するもので、現代の人に伝える必要のあることを取り扱っています。罪の起源、最初の殉教、最初の殺人事件など必要にして最小限の問題を述べています。この中で最も大切なことは罪の起源です。罪の結果、すぐにねたみが生じ、殺人が行なわれたのです。これは人の罪の結果は死であることを物語っています。さらに、この罪の結果、皮肉にも神との交わりのない部族の「すえ」から初代文明がきずかれたことを知らされます。

六章では洪水に対する備えと箱舟の特徴、その時代の世相を学ぶことができます。

七章では、洪水の始まりとその激しさ、および経過を科学的な面から学ぶことができ、正しく理解する助けとなります。特に著者が水文学の教授であることから、地形の問題やそこに及ぼした水の力などに関して理解しやすく取り扱っているのはすばらしいことです。

八章の洪水の経緯については、モリス博士の研究のすばらしさ、専門家としてのごまかしのない状況判断と実験に基づいた学びを見ることができます。

九章では洪水後に確立された政府と、救われた人の中にも罪の根があることを見ます。そして、ノアの死までを扱っています。十章は諸民族の起源について扱い、現在の世界の民族分布の軌跡をたどることができます。

十一章でことばの乱れによつて神は御自分の計画、すなわち、「人を地に満たす計画」を遂行されたことを見ます。さらに、ノアからアブラハムに至る系図を通して、洪水後わずか五百年位の間に環境悪化による寿命短縮を来した過程を見ることができます。

以上は、ヘンリー・M・モリス著 The Genesis Record の第一部と第二部で、創世記一章から十一章までです。この創世記一章から十一章までは、創造科学の解明にも大いに役立つ部分で、すべてのクリスチャン、すべての日本人がこの書を通してみことばの真理を見いだせることを切に祈るものです。

この原稿は、一九七八年十月から一九九〇年十一月まで「マハナイム」の一面で「聖書の日を通して地球」のタイトルの下に、カールトン・エルキンズ宣教師の協力を得て訳出して掲載した原稿を、原文に照らして再度訳し直し推敲したものです。この訳文が完成するために、多くの方々の協力があつたことをお知らせするとともに、特に全体の監修に当たって下さった群馬大学名誉教授黒住一昌先生（解剖学）の御努力には心から感謝しております。また、『聖書』と科学の会』主事上原義次氏は文章の推敲に、『創造科学研究会』事務の廣瀬千恵子姉は

